

大阪市立大学

都市研究プラザ開設記念

都市研究プラザウィーク

都市研究プラザ開設記念 国際シンポジウム

21世紀の都市像

—世界都市・創造都市・持続可能都市—



大阪市立大学 都市研究プラザ

大阪市立大学 都市研究プラザ開設記念
都市研究プラザウィーク

◇ 都市研究プラザ開設記念 国際シンポジウム ◇
21世紀の都市像—世界都市・創造都市・持続可能都市—

2006年12月21日(木)

式 次 第

13:00	開 会 総合司会	水内 俊雄 (大阪市立大学都市研究プラザ兼大学院文学研究科教授) 中嶋 節子 (大阪市立大学大学院生活科学研究科助教授)
13:10	開会の辞	金兎 暁嗣 (大阪市立大学学長)
13:20	司 会	加茂 利男 (大阪市立大学都市研究プラザ所長)
13:30	講 演	「 創造都市：概念的問題と政策的課題 」 アラン・J・スコット (カリフォルニア大学LA校地理学科教授)
14:05	パネラー	「 デュアル・シティ・モデルの課題 」 エドモンド・プレトゥセイユ (フランス国立科学研究センター主席研究員(教授))
14:30	パネラー	「 日本における創造都市の理論と政策的課題 」 佐々木 雅幸 (大阪市立大学都市研究プラザ副所長)
14:55		休 憩
15:15	パネラー	「 グローバル性、持続可能性、創造性——世界都市の比較 」 ミーカム・ヌウ (香港大学都市政策環境管理研究所助教授)
15:40	パネラー	「 権利の明確化——アーバニズムへの挑戦 」 アンネ・ハイラ (ヘルシンキ大学社会政策学科教授)
16:05	討 論	矢作 弘 (大阪市立大学大学院創造都市研究科教授)
16:25	質疑応答	
16:55	閉会の辞	水内 俊雄 (大阪市立大学都市研究プラザ兼大学院文学研究科教授)
17:00	閉 会	

都市研究プラザウィーク

都市研究プラザ開設記念国際シンポジウム

「21世紀の都市像——世界都市・創造都市・持続可能都市」

○ 開会・学長挨拶

水内： ただ今から「大阪市立大学都市研究プラザ開設記念国際シンポジウム」を開催させていただきます。4月に大阪市立大学本学に都市研究プラザという



水内 俊雄氏
大阪市立大学 都市研究プラザ兼
大学院文学研究科 教授

新しい組織をつくらせていただきました。もう12月になっておりますけれども、実は今月、後ほど終わりましたらちょっと訪れていただきたいのですけれども、時計台のあるキャンパスの方に新しい高原記念館という建物をOBのユニチャームの会長でいらっしゃいます高原先生からご寄贈いただきまして、その建物のオープンが12月1日でした。それに合わせましてその高原記念館のオープンも記念いたしまして本日国際シンポジウムを開かせていただいております。

都市研究プラザはさまざまなまちづくり活動や地域への貢献ということを、特に大阪市内を中心に目指しております。同時にアカデミズムの都市研究の国際的な拠点としての位置を確立することも一つの目標としております。

本日はそういうことも含めまして、海外の都市研究のフロントランナー、最先端を走っておられる先生方にお集まりいただき、「21世紀の都市像—世界都市・創造都市・持続可能都市—」というメインタイトルで海外からの先生、それから本学の方からも参加いたしまして開かせていただきます。本日は5時までという長時間にわたりますけれども、大阪市立大学は都市研究の中で特に理論的な貢献というものをごどのように発信するかというのを共に考えていきたいと思っております。そのキータームが先ほど申しました世界都市・創造都市・持続可能都市であるということで、この内容につきまして議論を深めていきたいと期待しておりますので、よろしくご静

聴のほどお願い申し上げます。

それでは本日最初に大阪市立大学を代表いたしまして、学長の金児暁嗣よりごあいさつ申し上げます。よろしくお願いいたします。

金児： こんにちは。大阪市立大学の学長を拝任しております金児でございます。本日はこの都市研究プラザ開設記念国際シンポジウムにたくさんの方々に足をお運びくださいまして大変ありがとうございます。この大阪市立大学も、法人化を機にこれまで以上に大学の特色というものを発揮していくことが求められております。



金児 暁嗣氏
大阪市立大学 学長

本学の創設以来の理念は、当時の大阪市長関一が創設の際に談話を発表しておりますけれども、それを的確に表現した「都市は大学と共に、大学は都市と共に」という言葉に凝縮されております。われわれは大学のアイデンティティ、そして自らのアイデンティティを「都市型総合大学」に求めておりました。大学の三つの役割であります教育・研究・地域貢献につきまして都市を学問・創造の場とし、その研究成果を市民生活に還元するということを目指してきました。

合衆国でも既に古くはマーチン・クロッチェの『The Urban University』、あるいは最近ではP・G・エリオットという方の『The Urban Campus』という著書が出ておりますけれども、確かに合衆国ではアーバンとかあるいはメトロポリタンという言葉で冠した大学に関する著書や論文が多数出版されております。合衆国でのそれらの用語というのは、これは都市に所在する大学が都市化の波に覆われて、そして都市固有の課題をたくさん抱え込むことから使われ出した言葉だというふうに理解しております。

それに対しまして本学は早くも1928年、この大阪という大都市に初めて大学が誕生した際に、むしろ積極的に都市を研究のフィールドとすることを目標としたのであります。まさに当時の関一市長の都市政策学者としての慧眼であったかと思えます。

そうしたことから本学はわが国の都市研究の先駆けを成してきて、そしてこれまでの研究の蓄積におきましては他を凌駕するものがあると自負しているところであります。法人化を機会にそうした本学の特色を成す都市研究を全学的に組織化し、地盤沈下の状態にある都市、なかんずく大阪を再生することにも寄与する研究機構として発足したのがこの都市研究プラザであります。

都市研究プラザは現在専任教員が2名、そして数名の特任教員と学内の兼任教員によって構成されております比較的小きな組織でございますけれども、しかし内外の研究機関、行政組織、あるいはNPO・NGOと密接に連携し、そしてさながらアメーバのようにネットワークを広げてさまざまな都市空間のすき間にも巧みに入り込んで都市研究プラザをつくり、都市社会から決して遊離するのではなく街に溶け込んだ研究を行ってきております。そうした都市研究プラザの研究活動は大阪をはじめとした都市の再生と活性化につながると共に、都市研究自体に革新のいぶきを吹き込むことであると確信しております。

この度の都市研究プラザウィークは、このような目的を持って立ち上げた都市研究プラザの開設を記念して企画されたものでありますが、本日は海外の一級の都市研究者をお招きしての国際シンポジウムでございます。本学が変化に向かって踏み出すこのシンポジウムが、本学を取り巻くコミュニティに変化をもたらす起爆剤となることを期待いたしまして、簡単ではございますがあいさつに代えさせていただきます。どうもありがとうございました。

水内： ありがとうございます。申し遅れましたけれども、司会は私、都市研究プラザに勤めております水内と……

中嶋： 生活科学研究科の中嶋です。よろしくお願

いいたします。

では本日の講演の先生方をご紹介させていただきたいと思えます。まず、基調講演アラン・J・スコット、カリフォルニア大学ロサンゼルス校地理学科教授。そしてパネラーの先生方としまして、エドモンド・プレトゥセイユ、フランス国立科学研究センター主席研究員（教授）。佐々木雅幸、大阪市立大学都市研究プラザ副所長。ミーカム・ヌウ香港大学都市計画環境管理研究所助教授。アンネ・ハイラ、ヘルシンキ大学社会政策学科教授。矢作弘大阪市立大学大学院創造都市研究科教授。そして司会が加茂利男、大阪市立大学都市研究プラザ所長です。

それでは加茂先生よろしくお願いたします。

○ シンポジウムの趣旨と狙い

加茂： 皆さん、こんにちは。都市研究プラザ所長の加茂でございます。今日は私が司会をさせていただきたいと思えます。最初に私どもの都市研究プラザという組織の紹介というか、考え方を少し申し上げたいと思えます。



加茂 利男氏
大阪市立大学都市研究プラザ 所長

「都市研究プラザ」という大学の組織の名前としては、誠にストレンジな名前を付けたわけでございますけれども、こういう組織を通じて私どもは新しい都市研究のスタイルを大阪市大からつくっていきたくと考えているわけでございます。プラザというこの名称に一番その考え方が集約されていると思えます。

都市研究プラザというのは新しいタイプの都市研究組織でありますけれども、なぜプラザと言うかといいますと、プラザというのは、広場という意味だと言っていいと思えます。広場といいましても誰もいないさみしい広場ではなくて、人がたくさん集まるマーケットプレイスのような、にぎやかな広場のことを言うわけです。そこに多くの人たちがいろんなところから集まってきて出会う。出会って対話をする。そして知り合いになっているいろんな考え方やアイデアをお互いに交換する。そのことを通じて相互



の理解と、異なる文化の出会いによってカルチャーショックを引き起こす。そのカルチャーショックが新しいアイデアをまたつくるといような、そういう広場をわれわれはこの都市研究プラザにつくりたいと思っているわけです。

そういう意味でこのプラザというのは、研究拠点としては高い塀や厚い壁をめぐらした閉じられた研究組織ではなくて、開かれた研究拠点にしたいと考えております。いずれにしても異なる多様な文化の接触というものを通じて新しい文化を創造する、新しい知恵や技術を創造する、そういう研究組織にしたいと考えているわけです。

それと同時に、先ほどお話がございましたように、私たちの組織は柔らかな組織にしております。一つの場所にでんと腰を構えて動かないというようなそういう研究組織ではなくて、いろんな場所、大阪や世界のいろんな都市を動き回ってその街に溶け込んで都市という現場の中で研究をする。そういう研究組織にしたいと思っているわけで、モバイル・インスティテュートとわれわれは仮に名付けているわけでございます。

こういう都市研究のネットワークの拠点としての都市研究プラザのリーチというのは、最終的にはやはり国際的なものにしたいと思っております、できればいろんな海外の都市研究組織と協定を結んで海外にも「現場プラザ」という私どもが現場で研

究する拠点をつくりたいと考えているわけです。

私たちのこういう都市研究プラザに対する考え方というのは、都市というものの本来の在り方、原型をもう一度考え直し再評価するということとつながっているように思います。都市というものはもともと血縁や地縁を異にするさまざまな見も知らなかった人たちが新しい世界に集まってきて、そこでいろんなこれまで知らなかったような考え方を交換し、接触をするという空間であったと思います。そこにさまざまな異なったアイデアやカルチャーを持った人たちが集まってくるからこそ、その多様性の中からそのカルチャーショックを通じて新しいアイデアがまた生まれてくるというメカニズムが都市には働き、そうであるからこそ都市は歴史の中における進歩の最前線という位置付けができたのではないかと思います。

こういう都市の原型を、われわれの都市研究プラザの中にもう一度再現したい。こうした都市の原型の再現を通じて、今世界の都市が直面している新しい都市への生まれ変わりをアイデアの上で先取りをするような、そういう研究ができればというのが私たちの願いでございます。こういう意味で、その都市研究プラザというこれまでになかった名称とタイプの組織をつくったわけであります。

本プラザといたしまして最初の大きな企画として、今回の都市研究に関する国際シンポジウムを開かせ

ていただいたわけでありすけれども、今回の研究シンポジウムでは、21世紀の都市の姿をさまざまな角度から考えるというので、割合枠組みを柔らかく設けているようなアイデアや発想がここに盛り込めるような会にしたいと考えております。あまりはつきりした明確なテーマではありませんので、何でもありという感じもしないではありませんけれども、しかしこういう緩やかな茫漠としたテーマの中で、ここにお集まりいただいた世界の第一級の都市研究者の方々に、それぞれこれからの21世紀の都市にとって何が大事か、何が問題であるかというようなことについて思いの丈をお話しいただきたいというのが今回のシンポジウムの狙いでありす。そういう意味で今日はいろんな考えが伺えると思っておりますけれども、ぜひそれを通じて私どももこれからの研究の糧にしていきたいと考えております。

ではシンポジウムを始めたいと思っております。お手元の資料集をご覧くださいながら、登場される研究者の方々のプロフィールをご確認いただき、いちいち詳しい紹介をせずにできるだけ効率的にこのシンポジウムを運んでいきたいと考えております。

最初に本日の基調講演としまして、カリフォルニア大学ロサンゼルス校地理学部の Distinguished Professor (日本語にあまり適訳がないのですが、特に優れた教授に与えられるタイトルでございます) でありますアラン・スコット先生にお話しいただきたいと思っております。大体スコット先生には30分から35分ぐらいの時間をかけて基調講演をお願いしたいと思っております。先生どうぞよろしくお願いたします。

○ 基調講演「創造都市：概念的問題と政策課題」

スコット： ご親切なご紹介をありがとうございます。今日はこの午後、お話をさせていただく機会を得ましたことを非常にうれしく光栄に存じます。特に



アラン・J・スコット氏
カリフォルニア大学LA校
教授

この都市研究プラザ開設記念という特別な機会にお招きをいただきましたことをうれしく思います。このプラザは都市研究の日本における大きな拠点となると思っておりますし、また将来長期にわたりクリエイティブな形でのコラボレーション、協力体制をぜひ図っていきたくと考えております。

・「新しい都市」としての創造都市

今日は「創造都市」、「クリエイティブ・シティ」というトピックでお話をさせていただきます。ただ、実は私はこのクリエイティブ・シティという言葉自体は好きではありません。その理由は私がお話を進めるにつれて皆さんお分かりいただけたらと思います。すなわち都市研究の分析的なアジェンダを提示してまいりますと、今日ある種の新しい都市化が現れ始めてきている。これは世界中のいろんなところで見られると思っております。アメリカであれ、ヨーロッパであれ、アジアであれ、ラテンアメリカであれです。この新しい種類の都市化は、新しい種類の経済構造やそのダイナミクスとかかかわっています。これは世界の資本主義でこの20年ほどの間に出てきたものともかかわりを持っています。創造都市という言葉は、この新しい都市化を表現する言葉なのです。

歴史的に資本主義的な経済のシステムは、それぞれの都市化のバージョンをとまなっていました。しかし私はこの都市化というのは経済秩序の結果というよりはむしろこれは独立変数であって、むしろ資本主義で都市化を伴わないようなものは考えにくいと思っております。都市化というのは結果ではなく、条件でもあると思うわけです。その条件の下に、生産やいろんな交換や消費が起こるのだと考えます。

歴史的な資本主義のさまざまなバージョンは、それに特有の都市化の形態、また都市の形態とかかかわっています。例えば工場のシステム。これは古典的な工場街とかかかわっていました。それからフォード式の大量生産というのはシカゴやデトロイト、ピッツバーグといったような工業の中心地の非常に大きなメトロポリスとかかかわっていました。さらに、新たに「ポスト・フォードイズム」時代の新しい都市化が起こってきたと思っております。これは今現在ますます明確になってきていると思っております。同時に、この

間までポスト・フォーディズムと呼んでいたものが、今や「認知文化的資本主義」と呼ぶべきものになっています。すなわち、今日の経済的な動きを見ても、経済体制、制度に生産のプロセスの脱ルーティン化が起こっている。新しい製品のプロトタイプには、ある種の認知的、文化的な側面がこれまで以上に大きく盛り込まれている。つまり創造性、革新性を伴うような先端的な産業の活動が行われているのです。こうした創造性はその都市にあると考えられるわけです。

歴史のこの時点では、この創造都市という概念自体は、批判的に吟味されるべきでありますし、またこの概念自体をつくり直す必要もあるかもしれません。しかし、そうはいつても、クリエイティブ・シティが大きなテーマとなっているという現実是我们の目の前にあると思います。

アメリカのMITの経済学者で、このテーマに関しまして素晴らしい研究をしているリビー、ムネンらの『新しい分業』『The New Division of Labor』という著作などを見ますと、最も支配的な現在の状況の特徴の一つは、コンピュータ化・デジタル化が経済の世界で行われ、これが「脱ルーティン化」を労働のプロセスにおいて引き起こしているということです。

この脱ルーティン化というのは、デジタル・テクノロジーや高度の科学技術的な労働力、生産システムの取り入れ、人のサービスの介在、こういったものが現代経済のより大きな要素になっていることを表現しています。シンボリックなコンテンツが、生産システムのアウトプットのなかでその比重を増しており、一般商品、コミュニティの中でも「美化」や「文化化」が起こっていると言えます。

すなわち文化自体が経済秩序の中で再生産されている。そして文化と経済秩序との収れんが起こっている。文化はますます商品化され商業化され、そして商品はますます美化され、文化化されていると言えると思います。これは現代の経済に見られる新しい労働分業の形態の一つです。そしてこれはある種の「認知文化的」な生産や仕事の形態とつながっています。

・現代経済と認知文化的活動

ではこういった認知文化的な生産や労働とは何か。私は、創造性という言葉に伴うあいまいさを排除したいということからこの認知的文化という言葉をおざわざ使っています。

認知的文化に関連する労働というのは、テクノマネジメント、革新志向型の生産、または情報サービスの提供の民営化、そして社会的に有用な適性や才能の移入、そして経験の商品化、商業化などです。こういったものがいま労働過程の中に入ってきています。現在の経済が脱ルーティン化し、コンピュータがますますルーティン化した仕事に取って代わり、創造的なキャパシティーあるいは認知の能力といったものを労働力の側で向上させていくという作用を果たしています。

しかしこの経済秩序を見る際に忘れてはならないのは、もっと深部に及ぶ脱ルーティン化であります。いわゆるブルーカラーの仕事への認知的文化の影響です。会計とか、帳簿付けとか、セクレタリーの仕事とか、あるいはタイプを打つ、こういったものが現在経済では需要がなくなり、別の部門へと労働力が押しやられ、ブルーカラーでマニュアルの作業を行っている労働者が別の部門へとシフトしているのです。

いまではバッチ（小作業工程）も非常に小さな組み立てになっている。そしてその機械のオペレーターあるいはセキュリティやメンテナンス、こういったものも今アメリカでは職種にも暗い影が差しています。ホテルやレストラン、管理人、雑役的な仕事もそうです。このように現在の経済で起こっている労働力に対する変化、これはますます広がる所得やその生活水準において、その上部層と下層との間の広がり、分離につながっています。

・新しい階層構造

社会学者は社会的な階層化が現在の社会の中で、これはますますその間が広がるような形で起こってきているということを言いますがけれども、古典的なブルーカラー、ホワイトカラーの労働力という層別化の形態や、古典的なフォード式大量生産やこれに対応する都市も、D・ベルが言った「ポストインダ

ストリアル・ソサエティ」とか「サービス・クラス」もなくなってきているわけです。1970年代半ばにはA・グールドナーがニュークラスということを使い始めました。R・ライシュは情報経済におけるシンボリックな労働者ということを行いました。最近ではケスラーが新しい、国を超えた資本主義者のクラス、キャピタリスト・クラスということをおっしゃっています。

また何といっても最近ではリチャード・フロリダが「私はこれを全く間違った分析だと思っているのですけれども」「クリエイティブ・クラス」ということをおっしゃっています。新しい「創造階級」が出てきているということです。私が認知文化経済の中での上部層と呼ぶ階層を、フロリダは「創造階級」だということです。

・創造性と都市

いろんな考え方がこの新しい状況を前にして出てきました。一つは理論として、経営管理面の議論があります。柔軟性、迅速な資本主義、人の資本、共感、クリエイティビティの促進等々、多くの経営理論に関する本がアメリカ・ヨーロッパ・日本でも現在出ています。

これと並行して、その都市政策をめぐる議論もあります。ここでは新しい形態の都市化というものを模索しているわけです。私はこれが「ニュー・エコノミー」というコンテキストの中で出てきていると見るわけですが、これは経済学者のグレバーによって、「コンシューマー・シティ」（消費者都市）と定義されています。

クラークによりますと、都市というのは「エンターテインメント・マシン」だといいます。またフロリダやランドリーによって、創造都市（「クリエイティブ・シティ」）という概念が提出されているわけです。

先ほども言いましたが、私はこのクリエイティブ・クラス、クリエイティブ・シティという言葉には、概念的には反対なのですが、現在社会で起こっていることを暗示してはいると思います。これはたしかに新しいカテゴリーの現象なのです。すなわち、創造性を持つと思うと、何か論理的な能力を超え

たものが出てくるのです。ただ私は、社会的な新しい社会の層がクリエイティビティやその学習、革新をしていくということは、あくまでも資本主義の一部であると考えているわけで、その点がフロリダやランドリーとの違いだと思います。

クリエイティビティとか、学習性、革新性、これはこの認知文化経済のダイナミクスの中で発生してくるものであり、都市化というコンテキストの中で起こってくるものだと私は考えています。

以上、まず論理部分を申し上げまして、つぎに「創造都市」について考え、さらにこの概念を超えて、新たな議論が可能であるのかどうかということをお話ししてまいりたいと思います。

・創造都市と産業集積

19世紀であれ、20世紀であれ、フォード式の大量生産の時代であれ、認知文化資本主義には、どの都市にもある一定の共通する構造あるいは特徴がありました。まずこういったそのロジックやダイナミクスのその都市の集積における背景にあるものを考えてみたいと思います。

理論的にこの点に関しましてはいろんな議論が出ました。集積を取り巻いて成長が起こっていく、それを補完する生産者同士の間でネットワークが進んでいくこと、そして地元の労働市場と規模の経済や、その経済の範囲が、都市の範囲にその労働市場が広がっていくということが重要です。このばあい、19世紀の工場の街であれ、大量生産の都市であれ、今日の都市であれ、都市というのは常に創造の場、クリエイティブな場があるということが欠かせません。これは地理的・社会的な出来事が、その地理的な空間の中でいろんなその取引関係の形態を取りながら結び付きをもつということです。ビジネスや社会的な関係でつながっている。創造性は、そのなかで、例えば衣服産業であれ、車であれ、映画産業であれ、どのような産業であれ、どのような歴史的な瞬間であれ、具体的な稼働性を持って発動されるのです。

このような集積のプロセスあるいはクラスタリングのプロセスというのは、メカニズムであり戦略であるということも言えます。すなわちこれは潜在的

な経済制度の中にあるベネフィットを具体的な競争的優位性へと転換していくものであります。集積することによって規模を大きくし、ますます多くのリターンを得ることができる。この集積経済が文化経済の中で特に重要です。加えて場所の独占力、独占的な優位を生かしながら、チェンバリンが言うように日常的に競争していくわけです。

今日、この種の都市化、あるいはグローバル化が起こっているということを、このあと詳しく申し上げますが、考えてみる必要があると思います。

・創造都市の都市形態

さて、現在の創造都市はどういった状況にあるでしょうか。いま申し上げた新しい形態の生産や仕事—ハイテクの産業であれ、文化経済であれ、サービス経済であれ、あるいは新しい職人的な業界であれ—が、都市の中に集積して工業地区ができると、これが地理的なコアとなって都市化のプロセスの中で発展をしていきます。認知文化経済の中で、その集積はますます進んでいくことになります。

例えばスライド10はロサンゼルス地図ですが、これはもう全く疑いなくバンガード（前衛）としての認知文化経済地区があり、それを取り囲む集積があります。それから文化的な経済も、ロサンゼルスの場合には特に映画やファッション、宝石やいろいろな手仕事、職人的なビジネスの集積があります。それからこちらは別の例でパリですが（スライド11）やはり疑いの余地なく新しい認知文化的な経済が出てきています。こういった中心地が映画や出版やファッションなどの経済活動の中心になっているのです。

これらの都市経済の内部を見てみましょう。これはロサンゼルスハリウッドですが（スライド12）、映画制作会社が集積しています。こういった映画制作会社が、ハリウッド周辺に集積しているわけです。

このような新しい経済活動が、いろいろな形をとって現出してきて、新しい都市化の力が出てくるわけです。

・R・フロリダの見方

R・フロリダの説明は違います。彼によれば、まず「創造階級」が出現し、認知文化経済をつくりだす。言い換えれば認知文化経済が出てくるのは、その背景に創造階級が生まれてくることから始まるのです。そのうえで、新しい経済が出てくる、新しい都市が出てくるということになります。

その結果新しい生産活動が起こるということで、多くの複雑な転換が出てきます。都市の景観が変わってくるわけです。生産空間のアップグレード化、社会的空間の再生が起こります。文化・娯楽の設備も増えていきます。クラークが言うところのエンターテインメント・マシンができてくるのです。また、美観性のある都市になるわけでもあります。パリであるとか、世界のどこでも、パリ、サンパウロ、上海、東京、ロサンゼルス、ニューヨーク、ロンドン、みなそうです。アイコン的な建造物も出てくるわけです。

創造階級によってこのような環境のリサイクル化が引き起こされ、その上で新しい認知文化経済、そして資本主義というのが生まれてくるわけでありまして、彼らに影響を与え、パワーが生まれ、都市もさらに増えていくわけです。新しいグローバル化の景観が出てくるわけです。

・創造都市論の批判的再検討

従来の創造都市論をもう少し検討してみましよう。北米においては、まず政策決定者が創造都市をつくりたいと思い、外側から何かを持ってこようとした。どういうところに、創造階級はひきつけられるかと考え、例えばアメニティを整えとか、創造的な雰囲気・文化の培養とか、また、お洒落なレストランをつくるとか、公園の整備をするとか、犯罪率を削減することが必要だということになった。またR・フロリダは、例えば文化的な寛容性を高めて、オープンな社会にするとも言っているわけです。

これは素晴らしい考えであるとは思いますが、私が議論をしたいのはこういった要素だけでは、創造都市づくりの公式にはならないということです。つまりこれらだけで私が考えるクリエイティブ・シティをもたらすことはできないのです。

・「創造階級」論への批判

創造都市を作るには、累積的に都市が成長する原因が積み重なっていかねばなりません。また生産システム、雇用制度がなければなりません。それが持続しなければならぬわけであり、生産システムが都市化のためのエンジンでなければならぬわけでは

その一つのいい例がアメリカのシリコンバレーです。いかにシリコンバレーが成長してきたかということを見ていきたいと思います（スライド17）。

これは何もクリエイティブ・クラスがそこにいたから成長したわけではありません。なぜシリコンバレーがシリコンバレーとして成長したかといいますと、最初はいわゆる産業センターとして都市形成したのです。実際ももとは果物の栽培地であったわけで、メキシコの安い労働力が入ってきたところであったわけです。基本的には偶然ですけども、ここにシリコンバレーの種がまかれたのです。それは、ウィリアム・ショックレーのトランジスタ・カンパニーが1955年にシリコンバレーで設立されたことです。そこから企業の分離やスピノフが起こったわけです。

そのうえでここに入ってくる、参入してくる人たちが出てくるわけです。はじめはクリエイティブ・クラスということではなくて、具体的にどのような労働力が必要かということでセミコンの領域であれば技師であるとか科学者といった人たちが入ってきた。そして防衛産業がシリコンバレーに60年代、70年代、80年代を通して拡張したわけです。

このようにいわゆる成長の原因となるようなものが積み重なって、もともとは果物の栽培地であったものが、世界の中でも最もハイテクな産業地域となったわけです。そのプロセスを見ていきますと次のような図式で説明できると思うのです。

まず最初の種がまかれました。それからスピノフが始まります。そして社会的な労働力の分離というのが生まれてきます。このスピノフは続きます、それがどんどん激化して集積が行われます。このメカニズムが発達して、非常に複雑な複数の面を持った労働市場が生まれてきたわけです。その上に社会的ダイナミクスが働いているのです。

当時の政策課題、政策思考としては、都市の繁栄を生み出す方向に持って行きたいと考えるわけです。そのために認知文化経済の生産を生み出したいと考えたわけです。この過程はシンプルな階梯でまとめられると思います。非常に複雑な政策の介入があるわけですが、まず最初にボトムアップを図らなければいけません。開発のプロセスが、トップダウンであったものに対してボトムアップでなければならない。そして集積経済に対しての外部性を持ち込んでいかなければならない。そしてこういった外部性の経済要因を取り込んで、例えばネットワークであるとか、労働市場、イノベーションのプロセス、そして創造力といったものをつくって行かなければいけません。そのうえでこれを持続可能な環境にしていかなければならないわけでは

そして都市計画がはらかなければなりません。とくに地域のコーディネーション、つまりその外部性を内部化するためのコーディネーションが必要です。いいかえれば認知文化の制度を作り上げていかなければならないのです。ポリシーメーカーとしては以上のようなことを考えておく必要があります。

・認知文化経済のモデル

次のようなカテゴリー分類ができると思います。このダイアグラム（スライド19）は明確にハリウッドの関係を示していると思います。まず大企業があります。大企業はハリウッドにもありますけれども、なかにメジャープレイヤーがいます。そしてネットワークがあって、これによって形ができていくわけです。もちろんサプライヤー、供給者がいなければならない。そして集積を起こすような企業、労働力の集積がなければなりません。

この環境を制度化していくということが、とても重要です。なぜならば外部性がどんどん入ってくるからです。ですから効果的なマーケットを管理するような、コーディネートする機能が必要となります。そして博物館、レストラン、また教育機関などなども必要です。これらは全体のシステムの一部となり、生産システム、都市化の一部を担っていかなければならない。

しかし効果的な集積を行うためには、分配機能も



必要です。つまり、こういう集積の中では政策決定者としては注意深く分配やマーケティング、商業化をどうすべきかということを考えていかなければならない。どういう製品をグローバル市場に出していくのか。ニッチマーケットに対してはどうか。そしていろいろな市場に対して何が適切なものであるかということを検討しなければなりません。

収益やマーケットに関する情報は、フィードバックしてきます。認知文化経済でも、例えばサテライト生産も行われるようになってきました。ですからある種の仕事に関しては、これは分権化していく。つまり中央集中ではなくて、例えばその労働力の安価なところで生産を行うということもやって、一部切り離していかねばならないわけです。

こういったものが起こってくると、いわゆる文化的なランドスケープ、認知文化や都市の景観には、多様性が出てくると言えると思います。

これはグローバル化とはまた違ったものです。グローバル化というと文化の均質性を意味すると考えられます。そして例えば消費パターンにおいても世界中で均質化してくるわけですが、そうではなくてここでは新しい認知文化経済の中ではこういった集積が起こって、新しい生産の先端や中心がいろいろなところに出てくるわけです。

スライド21ですけれども、これは世界における映画の製作拠点であり、一つの認知文化経済のいい

例だと思います。もちろん商業的にはアメリカが主要ですけれども、ヨーロッパの映画というのも現在では成長しつつあります。急速に成長しているインドのハリウッドもあります。香港、北京、上海、そして韓国、日本ももちろんそうです。そのほかの世界の地域においても、単に映画だけではなくていろいろな形態、認知文化生産というのが行われるようになってきて新たな開発が起こっているのだから、確かにグローバル化を超えて、さらに世界ではいわゆるポリボーカル（多声的）な、ポリカルチュラル（多文化的）な状況が生まれてきているわけです。

もちろん、認知文化経済のいわゆる暗い面というものもあるわけです。こういうような経済がさらに進んでいきますと、臨時的、偶然的ではなくて、内在的なダイナミクスをつうじて次のような問題が出てくると考えられます。

なんといっても、最下層の人たち、特に移民であるとか、違法労働が起こってくる。過酷に搾取される工場法を無視した雇用が起こってくる。その結果最下層の人たちと中層以上の格差が広がってくるのですが、この問題は現在悪化していると考えられます。

ロバート・パットムなどは、コミュニティの悪化、例えば法的なサービスの悪化、あるいはその公的な部分の脆弱化といったものが起こってくると言っています。そして新自由主義のために、グローバル社

会や国家、そして都市の管理がなかなか行われな
ようになってくる。だとすれば、単に創造都市には
良い面だけではなくて、政治の介入の必要なところ
があるわけです。新しい市民、例えば連帯感、結束、
社会性、そして政治的なコミュニティというものを
つくっていかねばならないわけです。

ですからいわゆる消費資本主義から新しい種類の
創造都市、そして認知文化コミュニティといったも
のが必要です。そして市民としての権利がすべての
参加者に提供できるようなそういったところに持つ
て行かなければならないと考えています。
ありがとうございました。(拍手)

○ パネル討論のはじめに

加茂： どうもスコット先生ありがとうございました。
基調講演で今回のシンポジウムの基本的な方向
といたしましょうか、議論の方向を打ち出していただ
いたと思います。私どもの大学にも「創造都市研究
科」という大学院がつくられております。それから
大阪市も今、創造都市戦略というのを打ち立てよう
としているわけですし、そういう意味でこれからの
都市を考える上で、創造経済というか、とにかくモ
ノを作るとか、工場でいろんなオペレーショナルな
仕事をするというのではなくて、認知的でかつ文化
的な仕事を通じて経済全体の付加価値を増大させて
いく作用を持った都市をこれからつくっていくとい
うことが21世紀の一つの大きな課題になるのでは
ないかと、多くの人たちは考えているわけです。

しかし同じ創造市という言葉を使ってもいろんな
考え方があって、スコット先生がいわれたように、
創造的な仕事をする人たちをただたくさん連れてく
ればいいという考え方もあれば、それよりも地域の中
にいろんな分業関係というものをつくりだして、
かつその分業している各セクターの複合性というか、
ネットワーキングを組み立てていくような制度的環
境をつくるのが非常に大事なんだというような考
え方もあるわけです。

いずれにしても、創造都市という言葉で表現され
ているような方向へこれからの都市が変わってい
かざるを得ないのだらうと思いますけれども、その
中でどういう政策を選択していくかということが、こ

れからの考えどころではないかというようなお話を
いただいたのではないかと思います。

このスコット先生の基調報告を元にして、これか
らパネラーの方々にいろんな角度から議論をして
いただきたいと思います。パネラーの方は4人
いらっしゃいますけれども、お二人が終わったと
ころで休憩を入れたいと思いますので、ただお話だけ
が一方向的に続くというのではなくて、途中で少し息
を抜く時間を入れたいと思いますのでそのつもりで
お聞きいただければ幸いです。

お配りしています資料集を見ていただきながら、
資料集の中に各パネラーのお話のサマリー、要旨を
アブストラクト集という形でまとめております。英
語と日本語の両方でまとめておりますのでそれを
ご覧いただきたいと思います。もし英文の論文全体を
読みたいという方がいらっしゃいましたら、受付の
ところに少し用意をしておりますのでお受け取り
いただきたいと思います。

ということで、これからお話をお願いしたいと思
いますが、これからのパネラーのご発言は大体お一
人20分から25分という感じで、時間の配分を考
えていきたいと思っています。

それでは最初にエドモンド・プレトゥセイユ先生
からお話しいただきたいと思います。プレトゥセイ
ユ先生はパリにいます全国科学研究協議会の研究
部長をなさってまして、政治研究所の上級研究員
でもございます。プレトゥセイユ先生のお話のタイ
トルは「二重都市モデルの抵抗」ということになっ
ております。どんなお話が聞けるのか大変楽しみ
でございます。どうぞよろしく願いいたします。

○ 冒頭発言 1 「二重都市モデルの抵抗」

プレトゥセイユ： あ
りがとうございます。
本日はお招きをいた
だきましてありが
うございました。最
初に私の研究活動、
あるいは考えにつ
いて述べさせ



エドモンド・プレトゥセイユ氏
フランス全国科学研究協議会 研究部長

ていただきたいと思
います。これまで何
年にもわた

って加茂先生とグローバル・シティやこの都市研究プラザの開設の将来的な可能性について、ディスカッションしてきておりますが、これを継続しつつ、創造性豊かな研究活動を共に続けていければと思っております。

さて、今日私は「都市の二重性」ということについてお話を申し上げますけれども、最初に、私のペーパーの最終版はウェブサイトの方で出ておりますので、そちらをまたご参考いただければと思います。

私の話のテーマはスコット先生のテーマと同じではありますけれども、内容的に違ってまいります。特に先生の方からは経済的なダイナミクスについて、まずお話がありました。すなわち分業であったり、あるいは空間の分離に変化が起こっていく。そして新しいタイプの経済あるいはその集積が行われてきているというようなお話がございました。私の方は、都市のより社会的な側面についてお話を申し上げたいと思います。もちろんこの両者の間にはつながりがあります。

といいますのも、都市の社会的構造は、その都市の経済のダイナミクス、労働の分業状態に大幅にかかわりがあるわけです。この点のつながりに関しまして、ハワード・ベッカーの「アートワールド」というペーパーの中で労働の分業、これは最も文化的なその産物である、例えば映画産業などを取り上げているわけですが、創造性のプロセスを理解するためには非常に多くの種類の労働者が文化の創造に参加をしている、貢献をしているということを忘れては理解ができないということを言っています。

そしてこの創造のプロセスを、社会全体の生産プロセスの結果として見る場合に、これは単に才能のあるアーティストのみが行っているわけではないということで、この点は重要であるということを私からも申し上げたいと思います。

以下簡単に、大都市で起こっている変化について私の考えを述べてみたいと思います。

・二重都市と世界都市

いわゆる「二重都市」モデルについてのディスカッションですが、まずは20世紀の後半から大都市

の社会の性質を見るということで、観点が随分変わってきているということを申し上げたいと思います。

戦後の数十年間、大都市はますます豊かになっている場所であり、そしてモダニティーにアクセスができるいい場所である。社会的なその流動性・可動性をもって人々が中産階級になることができる場所であるというような見方がありました。

しかし1970年代以降、大きな観点の変化が生まれてきました。そして同じ大都市が今度は貧困であるとか暴力であるとか、あるいは分離の場所であると見られるようになってきたわけです。19世紀の都市のネガティブな側面に立ち帰るかのような、そういった見方が出てきた。これは文学や映画でもそうですけれども、例えばサイエンス・フィクションの映画ですね。80年代の後半から90年代にかけては、『ブレードランナー』、あるいはジョン・カーペンターの『ニューヨーク1977』といったような映画が、都市というのは富と権力が孤立した位置にあり、残りの広範な地域は貧困の地域ですけれども、それがもう全く野蛮な暴力に満ちた世界になっているというような描き方をしています。

社会科学の分野におきましては、われわれは二つの著書をこういった観点の変化をとらえたランドマークとして挙げられると思います。一つはモレンコフとキャステルの『二重都市』(『デュアル・シティ』)、もう一つはサッセンの『グローバル・シティ』です。

とくにサッセンの『グローバル・シティ』はいろんな形で非常に大きな影響力を持ちました。あとからこのお話をなさる方もいらっしゃるかと思います。私から見ると特に強い影響は、「二重都市」モデルに関して強力な経済的論拠を出したということです。なぜ大都市は分離が進んでいるのか、その社会のトップの層、非常に豊かで所得が増えている層、非常に豊かな近隣地区。それともう一方では、ますます多くの貧しい労働者が貧しい地域に住んでいる。それはなぜかといった理由を説明しています。

・二極分解ではなくアッパーシフト?

この理論は、いわゆる中産階級が消えていっているという表現を使っています。すなわち社会構造が二重化しているという見方です。それからまたこの

都市の二つの側面がお互いに対立しているという意味での二重性という見方でもありました。

私の最初のポイントですが、西洋の世界においてこのように大都市を見るという見方は誤っていると思います。なぜ間違っていると思うのかということをおあとからご説明申し上げますが、この説は誤っているけれども、批判に対する抵抗力があることも重要だというのが私の考えです。

まず職業構造あるいは所得の構造、または教育の構造ということをお考えた場合に西洋の世界における大都市を見ますと、そこには実際には二重性が出ていないわけです。それが間違っているという指摘の理由のまず第1点です。例えば、職業ということをお考えた場合に、クリエイティブ・クラスの登場によって二重化が見られるのか。そうではありません。スキルも賃金も低いサービスの従事者は随分いる。ブルーカラーの労働者、特に産業労働の従事者は目だって減っている。そしてホワイトカラーのオフィス・ワーカーが、コンピュータであるとかいろんな機器に取って替わられてしまっている。

ということで全体像として見てみれば、低賃金の仕事は増えているというよりはむしろ減っているということが多くの都市には見られるわけです。都市の二重モデルが想定するいちばん下層の人々が増えているわけではありません。

では中間層はどうかということですが、もしも何かツールがあってこの中間層の中間の部分、ミドルクラスというものを見ることができれば、ここは、むしろ消えているのではなくて増えているわけです。少なくとも20世紀中はそうです。

二重化が起こっているということではなく、全体的な社会構造がより上のアッパークラスあるいはアッパーミドルのクラスへとシフトが見られるということ、そしてより貧困なカテゴリー、低賃金の仕事に関してはその産業あるいはサービス業のなかのプロレタリアートが増えているということが、パリやロンドンでも同じようなデータが見られています。それからニューヨークやロサンゼルスでも今、分析・評価をしてみますと、似たようなトレンドが出ております。

また私の同僚がほかのヨーロッパの都市に関して

も評価をしておりますけれども、似たような結果が出ています。そしてまたわれわれ同僚の中には東京でも仕事をしている人がいますけれども、やはり似たような特徴点が見られるということが、まず第1点として言えます。

それからスペース、空間に関しましては、通常これは非常にその都市の豊かな地域というものがある。その新しく豊かになってきた層が住むような地域があり、それに対してその沈下していく貧困な恵まれない地域があるという見方がありますけれども、こちらもやはり都市の見方として正しい見方ではありません。方法論的に詳しくは申し上げませんが、もし討論のときにご質問があればご説明申し上げます。

特にパリの場合はそうです。私はパリのことを扱っていますが、実際われわれが観察してみているのは、豊かな地域というのはより排他的になってきているといいます。これは一つ、モデルの確認になります。同時に、ごくわずかな労働階級のマイノリティーの人たち、ごく少数の人たちのみが貧困化しているということです。ですので、労働者の近隣地域は社会的な地位のプロファイルは、同じかもしくはやや改善しているということで、この面でも二重性のモデルには必ずしも当てはまらないわけです。

さらに現在のモデルと比べてみますと、パリの場合で最も大きな、全体の人口の45%を占めるグループは、実際に社会的に混在した地域に住んでいる人たちであるということです。すなわちアッパークラスの人たちが少しと、それからミドル・ミドルクラスの人たちが多数、さらにワーキングクラスの人たちが多数。こういう人たちがお互いに混在しているような地域に住んでいるわけです。そしてこういう人たちというのは、必ずしもその都市の中での比率としては低下をしていません。ですので、何か具体的な特別な二重化が起こっているわけではないということです。もちろんご質問がありましたらまたお伺いしたいと思いますが、事実関係の確認としてこういった状況があると思います。

・二重都市論の虚実

ではなぜこのような支配的な見方、二重都市とい

う見方、都市の二重性という見方が、いろんな研究者の反証提示があるにもかかわらず、非常に強く、抵抗力をもって生き残っているのでしょうか。まず第1に、私のお話からもご理解いただけたと思うのですが、このモデルは全体として間違っているというわけではないわけです。幾つかの現実のエレメントを取り上げています。社会的、空間的な分布における対立する両端の部分を取り上げてはいるわけです。そしてそのような例外的なケース、この分布の両端の部分から例外的な部分を取り上げて、真ん中の分を抜かしてしまってモデルを作り上げているということが言えます。そのために、このモデルに抵抗性がついているという要素があるわけです。

現実性に基づいた部分が確かにある。しかし見逃している部分は、恐らくその都市が変化していく、形態が変化していく上での障害になる部分であって、見方を難しくさせる部分であるかと思えます。

それからもう一つ、このモデルは非常にシンプルであり、またドラマチックであるということもかなり魅力があると思えます。そしてメディアはこういったことが大好きです。

例えばメディアが社会学者にインタビューをする際、社会学者がより複雑なことを言いますとインタビューは世には出ないわけです。退屈なディスコースになってしまうわけです。複雑性というのはメディアにとってドラマチックでもありませんし、またドラマ化することも難しいということで退屈なわけです。

それから三つ目の説明としては政治家の存在が挙げられます。政治家はメディアが大好きです。そしてメディアと政治家の間にはそのようなお互いに好んで使うという関係があります。そしてメディアと同様に政治家は複雑性を好みません。またドラマ化も好きです。

政治家が好むのは、社会的な排除のモデルという別のバージョンになります。すなわち、これはなかなか話すのは難しいのですが、より豊かな層がますます豊かになっている。そしてそれに対する社会問題として恵まれない地域で貧困化がますます増えている。そしてそういった地域が社会からは除外された地域として、対立するものとして描かれて

いるという描き方です。そうすると同情、熱意、あるいはその貧しい人を助けるチャリティー精神といえますか、皆もちろん貧しい大変な人を助けたいと思うわけで、そういったものに訴える力があるということなのです。

それから、研究者や活動家の責任もあります。研究者というのは一部こういった表象の再生産にかかわっているわけです。そしてこの研究には資金が出ますけれども、資金が出るのはやはり政治家が設定したアジェンダに対して出るわけです。そしてこれはやはりヨーロッパでもフランスでもそうですが、多くの文献が恵まれない地域に関して出ています。しかしそれ以外の都市の地域に関する文献というのは少ないわけです。政治家が選んだアジェンダに対する研究ということになりますから。

それからメディアのドラマ化の成功といったこともこれに絡んできます。研究者というのはしばしば活動家と関連しています。そして状況をドラマ化する。最も困難なケースについて予想します。これが実際にこういった地域を応援する議論になるわけです。多くの研究者はこういった都市に関しての議論をしようとするわけですが、やはり複雑なもののはなかなか難しい。マイノリティーが必ずしも全体を表しているわけではないのだということについて、その複雑ではない議論で対抗するということが難しいわけです。

・将来の都市：光と影

将来に関してですが、一つのエレメント、政治的な問題を取り上げ将来の都市がどうなるべきかということをお話し申し上げたいと思います。特に重要なことといたしまして、変化を継続していく経済や労働といった、スコット先生が話されたような過程の中でどうかということに関しましては、もちろん将来はまだオープン・クエスチョンで、定義がはっきりしない。特に社会構造もどうなるのかよく分かりません。といいますのは、その多くが政治に依存すると思うからです。こういった形態変化に対して、政治というのは非常に大きな役割を果たしていると思います。単にこういった動向、トレンドに関しては経済決定論だけでは説明がし尽くされないだろう

と考えています。

明るい側面と考えられることはあると思うのですが、ネガティブなところについてはあまり申し上げていないのですが、一つだけ申し上げます。まず社会的な構造がより脆弱化していくということ。特にミドルクラスがそうです。ミドルクラスというのはワーキングクラスと同様、仕事が不安定である、労働契約が不安定である、あるいは賃金が増えずにむしろ減少している、そして社会的なモビリティ、流動性という面でも不確実である、リタイアしたあとどうなるのかということが不確実である。多くの人は、55歳になりますとレイオフされてしまいます。そうなりますと不安はますます増すわけです。自分たちの子どもについて将来どうなるのかという不安です。

そういった強力な感情が背景にあるので、子どもたちが社会の中でより上流へと動いていく可能性はむしろ減っていくのではないかといったような感情が非常に強くなっています。それは特にフランスのような国におきましては、ワーキングクラスの中でも安定した部分、ミドル・ミドルクラスの人たちが、1990年代の半ばから2000年にかけて、グローバル化が非常に進んだ結果としての社会保障システムや公的年金システムの改革、ネオリベラルな労働契約や労働法の改革、そしてヨーロッパの憲法の制定の計画に対する反対票を投じるという動きに表れてきました。

これは基本的には、ネオリベラルな支配的思考型にもとづくヨーロッパの政策がヨーロッパ憲法になるということに対する反対票であったと思います。したがって、われわれの社会には政治的な変化の可能性はあり、新自由主義的な革命はアメリカやイギリスよりも、穏やかな形で起こるのではないかと思います。

なんといっても社会保障のシステムは、ヨーロッパでは全体的にはしっかりしている、そしてこれを守ろうとする動きも随分あります。政治的な意味での動員は、ヨーロッパのレベルでは十分な強さをもって支配的なネオリベラルな志向性、今までわれわれが経験してきたような志向性を変えていくことができる十分な力があると思います。

また、都市化の動きはあるわけですが、一つ明記すべきは、こういった政治的動員の結果として、ごく最近までよりもより幅広く、ワーキングクラスの最も貧困層、またワーキングクラスの中でも移民の人たちとのつながりが出てくるのではないかと、連帯が出てくるのではないかと思います。

これはもちろんまだその大部分がオープン・クエスションです。どうなるかは分かりません。ミドルクラスの動員についてはテレビでも暴動があったのを、皆さんご覧になったかと思います。1995年11月にフランスでありました。こういった政治的なあるいは労働階級の動員、これは総体的に貧しいスキルのない若者、またその多くが移民の親を持つような、そういう人たちによるものでした。しかし大多数のほかのこのクラスの人たちは加わっていないわけです。そしてこの移民全体が伝統的な仕事や政治的な組織、左翼的な組織の中で代表されているわけではないわけです。

ですから、将来の多くはこの二つの動き、政治的な動きと労働者の動きというものが結び付くのかどうかということにも大きく依存していると思われるます。

加茂： ありがとうございます。今年になりました日本ではいわゆる格差構造の問題というのが非常にクローズアップされてきていまして、ヨーロッパやアメリカよりも大体10年ぐらい遅れて、ニュー・エコノミーの結果として社会的な階層格差が起こって、それが新しい社会問題を生み出しているのではないかと議論が大変活発になってきているわけです。

アメリカやヨーロッパではそういう議論を80年代から続けてまいりまして、特に世界都市における二重都市化、光の当たる部分とそうでない部分との分裂、あるいは「分裂都市」などという言葉も出ましたし、私などは「二都物語」という言葉を使ったりして、都市の非常に華やかな繁栄する側面とそうではない側面との分裂に現代都市の非常に大きな病理が表れているのではないかと議論してきたわけですけれども、スコット先生は以前からそういう議論は少し乱暴過ぎるのではないかと、言ってこられま

した。単純な二極分解モデルというのではなく、もっといろんな複雑な要素が今の社会構造の変化の中にはあるので、そういうものをちゃんと分析をした上で都市の将来への方向を考えなければ、きちんとした政策は打ち立てられないのではないかという議論をしてこられたし、今日もしていただいたと思います。

明日も恐らく世界都市に関する第1セッションの中で、こういう議論が継続していくのではないかと思いますけれども、取りあえず今日、少しスコット先生のお話とはニュアンスがどこまで重なっているのか、重なっていないのかよく分からないところもありますけれども、非常に興味深い論点が出てきたなという感じがいたします。

それではもう1本続けて報告をさせていただきたいと思います。2人目のパネラーとしまして大阪市立大学都市研究プラザ副所長の佐々木雅幸先生の方から、日本における創造都市ということテーマにしてお話しいただきたいと思います。

〇 冒頭発言 2

「日本における創造都市の理論と政策的課題」

佐々木： 皆さんこんにちは。佐々木でございます。今日、私の発表は聴衆の多くの方が日本人の方、日本語を使われる方なので、日本語でパワーポイントで紹介いたしますが、英語版のパワーポイントのプリントも併せて作っておりますので、それをお持ちの方はそちらをご覧ください。それより分かりやすいと思いますので、ぜひご覧ください。

最初にスコット先生から大変刺激的な問題提起をいただきました。実は2年前の2月に、この大阪の別の会場でやはり創造都市をめぐる、世界的な論客を集めたシンポジウムを開催いたしました。そのときに今日お話に出ましたチャールズ・ランドリー、それからピーター・ホール、そしてスコット先生。



佐々木 雅幸氏
大阪市立大学 都市研究プラザ 副所長 兼
大学院 創造都市研究科 科長

さらに私どもが加わりまして議論をいたしました。そのときリチャード・フロリダという名前が出てきました。でも彼は呼ばなかったんです。やはり呼ばなくてよかったなと思っているのです。なぜ呼ばなかったかということ、単純にギャラが高過ぎたということなんです。これは私ども学者のレベルのレートとは全く違まして、テレビや映画のスターの料金に彼はもう跳ね上がっております、彼自身がクリエイティブ・クラスになっているんです。学者の常識と随分違うというので私どもは憤懣やるかたないといえますか、ちょっと行き過ぎだぞという議論をしております、今日のスコット先生の話は、私はほとんど全く「我が意を得たり」ということでございます。

・創造都市の文明的な意味

あらためて創造都市という用語について、私どもがどのように定義し、日本においてどのように政策的にこれを発展させていけるのかという問題を私は考えておまして、そういったことで時間が短いので恐縮ですけれども、要点的にお話をしたい。

それから実は学者のレベルでは当たり前になっていることではありますが、今日会場にお集まりの皆さま方には必ずしもまだ十分理解できていないような問題もあろうかと思っておりますので、やや論争の前提になっている状況の問題もお話ししながら日本の様子をご紹介したいと、こういう考え方で話を進めてまいります。

最初に、私はこの10年近く、創造都市とさまざまな文化や創造性をめぐる議論に、世界的な会議に出てまいりました。その中で最も印象に残っている会議の一つが、2004年の8月にバルセロナで行われました「ユニバーサル・フォーラム・オブ・カルチャー2004」という会議でございました。専門家の間ではバルセロナはもう創造都市の一つとして代表的ケースであるというのは、もう皆さんご承知のことです。そこで行われた会議のテーマが私にとっては大変素晴らしいものに思えました。

先ほど来出ておりますように21世紀というのは大変グローバル競争が激しくなって、世界的に格差広がっているわけです。そして特に一部の世界都市

のトップのアップークラスは少しずつ上がってくるけれども、世界の底辺の国々の文化が壊れたり、あるいは生活ができなくなっている地域が増えております。そういった格差拡大を食い止める必要がある。そして、その世界の背後にあるキリスト教世界対イスラム世界、あるいはその他の宗教との間の対立の激化という問題をどのように緩和していくかという問題がある。そういうことをグローバルに対話をしていくというテーマが、全部で141日間にわたる大きなイベントとして行われました。

私は特にこの中で文化権、文化的権利と人間発達と題するシンポジウムに招かれまして基調講演をしたわけですが、ユネスコが後援をいたしました。これから申しますように私は創造都市というのは、市民の誰もが文化的権利が保障され、誰もが人間的発達というものを保障されている都市でなければいけないというふうに考えておまして、そういった考え方、これが大前提であると思うわけです。文化に関する権利というのは、市民誰もが優れた芸術を受け止める、享受する、消費する、一方で創造する。この両方の権利が守られなければいけません。

併せて文化がグローバル化していく中であって、他人のアイデンティティを損なうようなアイデンティティというもの、やはり許されない。つまり、ミスター・ブッシュとイラクの人々の間の対立をアイデンティティのぶつかり合いとしてそのまま見過ごすことができないという考え方が示された。これをマルチプル・アイデンティティというのですが、アマルチア・センが言っている問題です。こういうことが創造都市の哲学的といいますか思想的バックボーンの一つになるのではないかと考えております。

それで、私自身はやはり世界都市と創造都市の問題を考える上で、9・11事件というものが世界中に投げかけた問題を深く受け止める必要があるだろうと考えておまして、世界都市という在り方が少数の世界のグローバルの経済というものをコントロールして、そこに富が集中するような都市の在り方。そういったことに対する反感というものが9・11事件の背後にある。一方で創造都市というのは、それと違う都市の在り方を求めようということが、つまり都市と都市の相互的なネットワークで

す。こういったことが背後にあると考えております。

・創造経済・創造産業

そして、これは先ほどスコット先生が言われましたので省略いたしますが、明らかに20世紀の製造業をベースとする経済から、21世紀のいわゆる知識情報経済へのシステムの大きな転換というものがもたらした変化の中に創造性というものが位置付き、創造都市というもの、あるいは創造産業というものが議論される背景にあると思われまます。

この問題を解く鍵は幾つかあるわけですが、一つはかつてイギリスの文化経済学者であるジョン・ラスキンが100年以上前に書きました本の中で言っているわけですが、人間が行う活動にはオペラとラボールの2種類があって、いわゆるルーティンワークとしてラボールですね、レイバーを行うということと、それから創造的な活動としてオペラ、すなわちワークを行うと。この両方の問題です。いわばルーティン的な仕事から、つまりラボール主体からオペラ主体の経済組織に変化しているということの理解がまず一つ必要である。

それから私自身は創造都市論の元祖といいますが、一人としてジェーン・ジェイコブズを挙げることにいたしております。彼女の特に *Cities and the Wealth of Nations* という本がございまして、その中でイタリアの中部の中小企業と中小規模の都市ですが、こういったもので構成されてくる「第3のイタリア」という地帯、ここの都市の在り方を創造都市と呼んでおまして、いわば今日スコット先生が言われたポスト・フォーディズムの社会と経済あるいは文化というものが、こういったヒューマンスケールの都市のネットワークということの中に示されています。

私自身は金沢大学に15年おりましたときに、このボローニャと金沢の比較研究を通じて創造都市のモデルを考えるということをしてまいりました。したがって、イタリア語でピッコロインプレーゼとか、アルティジャーノ（職人企業）とかいいますが、イタリアの非常に小さい企業ではあるけれどもネットワークを組んで生き生きとして活動しているのです。そしてオペラ主体の産業の在り方が

特徴的です。これがやはり大量生産以降の、大量生産を超えた社会のものづくりのベースのあるのではないかと考えているわけです。こういう話は時間がいくらあってもできませんので次へ行きます。

そのジェイコブズの議論の延長線上でピーター・ホルの本が出てまいりまして、ここではいわゆるクリエイティブ・ミリューとかイノベティブ・ミリューというものを軸にして、世界的な大都市の発展の論理を解き明かしております。

そして先ほど話に出ましたチャールズ・ランドリーの『創造的都市』*The Creative City* という本がありまして、この本は私の友人が日本語に翻訳していることもあって、日本の多くの都市政策研究者は読まれております。このランドリーの本の特徴とは、ピーター・ホルが示しましたクリエイティブ・ミリューというものを軸にして、そのミリューがさまざまな都市の問題を創造的に解決していくようなアイデアを見だしていくというプロセスを大事にしているわけです。

私にとって彼は友人の一人ではありますが、印象に深いのはそれぞれの都市が持っている文化遺産、あるいは文化的伝統というものが都市のアイデンティティというものを形成していて、人々がそこで新たな対話を行う、つまり伝統と現代というのを対話しながら新しい都市の固有の文化をつくっていくという考え方を示しています。伝統と創造という問題を絶えずその都市の中で考えてみようという問題提起をしまして、都市はそうした中で維持可能なプロセスというものが生まれてくるということを私は特に印象深く受け止めています。

一方でアメリカでは、先ほどから批判的になっていますリチャード・フロリダというスーパースターが登場したわけで、この話は皆さんもあるいはご承知かもしれませんがとても分かりやすい議論をしました。創造都市というのは創造階級が集まる都市です。創造階級が集まる指標は、例えばゲイが多い街だという形で非常に分かりやすく指標化した。そうしたことが逆に言うと、伝統的なヨーロッパの都市政策研究者、あるいは日本の主としてハードのインフラストラクチャーをつくることにずっと集中し

てきた、つまり箱物づくりという日本語を使いますが、コンテナですね。そればかりをつくってきた人たちにとってはとても印象的だったのでこのフロリダ説も広く普及していますし、ランドリーの考え方やフロリダの考え方が、今日本の中ではいろいろ渦巻いています。

そして、やはり今日論点の一つになりましたのは、創造都市といえどもやはり都市のエンジンは経済です。この経済組織をどのように考えるか。であれば、文化関連産業なのか、創造産業なのか。いろいろ言い方はあるのですがいずれにしても文化と深くかかわった産業群というものが、その都市経済の中で一定のウェートを占めている。そうするとそういったものをこれまでの産業と結び付きの中でどのように発展させていくかということが必要になってきた。

日本では創造産業という言葉自体があまり普及していません。その理由は経済産業省が創造産業という言葉を使わない、あるいは文化産業という言葉を使えないという問題がありまして、経済産業省はコンテンツ産業というものを振興している。これは詳しいことは時間がなくて申せません。

私は世界的な会議に出ますと、創造産業という言葉を使って議論することが多いので、それについて紹介をしておきます。ここに上げております「個人の創造性、スキル、才能を源泉とし、知的財産権の活用を通じて富と雇用を創造する可能性を持った産業」という定義はイギリス政府の文化スポーツメディア省が採用しているものでありまして、アジアの香港やシンガポールあるいは上海でもこの定義で創造産業の振興を行っています。

ポイントはこの同心円モデルの中心部分のところに極めて創造的な活動というものを置いていて、それ自体は決して経済的に、つまりプロフィットを必ずしも生まれないような、ノンプロフィットの文化セクターであるけれども、極めて創造性が高いセクターがあります。その創造性の高いセクターから次第に出版とか建築とか観光とか、創造性自体はあまり含まれないけれども商業的に成功するセクターがその周りにあるという構造である。ポイントはその創造的あるいは収益の上からという構造である。ポイントはその創造的あるいは収益の上からという構造である。ポイントはその創造的あるいは収益の上からという構造である。



活動をどのように都市が大事に育てられるのか。あるいは、そういったところに人材をきちんと配置できるか。こういったことになるかと思えます。このカテゴリーに基づいて日英の創造産業の市場規模と就業者数との比較をした表を作成しましたがこれは省きます。

私自身の創造都市の定義はここに書きましたように、「市民の創造活動の自由な発揮に基づいて、文化と産業における創造性に富み、同時に脱大量生産の革新的で柔軟な都市経済システムを備え、グローバルな環境問題やローカルな地域社会の課題に対して、創造的問題解決を行えるような創造の場に富んだ都市」。やや長いのですが、今までご紹介しました説を一応全部網羅的にしております。

そして六つの創造都市の条件というものを出示しております、先ほどから議論されていますように創造階級だけが頑張っているという都市では駄目なので、芸術家や科学者が自由な創造活動を展開するのみならず、一般の労働者や職人の方々もそれぞれの能力を発揮できるような都市経済システムというものが必要であって、それを支えるインフラストラクチャーであるとか、生活の質の高い社会サービスが提供されているとか、都市の中での生産と消費というもののバランスが取れているとか、そうしたことを踏まえながら最終的にやはり自治体の行政が創造的になっていかないと都市は変わらない。そのため

には創造的アイデアを発揮できるような独自の行財政権限をもった自治体行政機構や創造的な公務員がいなければならないと思います。

・日本の創造都市政策

さて、そうしたことを前提として、日本における創造都市の取り組みについて時間の許す限り簡単に紹介してみたいと思います。

私は15年金沢にありまして、この45万というヒューマンスケールの都市でありまして、これは人口の規模はちょうどボローニャと匹敵します。ボローニャと同じように伝統的街並みがありますし、職人工房や伝統芸能がありますし、何といても内発的に発展を遂げた都市の中の経済システムが非常にしっかり根付いている。そういったところに現代のアート、コンテンポラリーアートというものを持ち込んで、新しい創造的な都市をつくらうという計画が行われています。

そういった意味では従来から、本学の名誉教授であります宮本憲一教授が都市の内発的発展論というもの唱えられてありまして、そのモデルが金沢でした。金沢という都市が培ってきた地域の中での経済循環だとか、あるいは地域のインダストリアル・ディストリクトに密着した流通組織だとか、そういうものをベースにしてその上に産業が展開した。そして市民が街並みやあるいは環境を保全するための

さまざまな運動を起こし、それを行政が積極的にきめ細かく応援する。そしてさらに最近ではグローバルニッチトップという形で、小さい企業だけでも、例えばこれはお豆腐を作る自動システムを作っている世界に一つしかない会社です。それから回転ずし、ニューヨークやロンドンやパリにもありますが、回転ずしのこのシステムは金沢の企業が作ってしまし、世界で2社しかない、2社とも金沢にある。こういうグローバルニッチトップというものが生まれてくる。伝統産業の中でもどんどんその革新が起ってくる。

それは言い換えますと産業のベースにカルチュラルキャピタル、すなわち、文化資本というものがあり、その文化資本というものの成果を産業が付加価値を高めるように動いている。これからの経済というのは経済的価値プラス文化的価値が加わって初めて強い国際競争力を持つわけです。そういう意味で世界に開かれた文化資本というものをどれだけ都市が大事にできるか。そして都市の中ではその質の高い文化資本の集積を生かして経済発展を図る。これは文化的生産と呼ぶべきものです。先ほどスコット先生も文化的生産という概念を使われましたけれども、私の考え方は、大量生産のモデルの次に来るのが新しい文化的生産であって、それが創造都市の経済的基礎にあるだろうと思います。

今、金沢がチャレンジしている事業ですが、金沢の中心部に現代アートの専門の美術館を2年前の秋にオープンいたしました。この美術館自体大変な世界的な話題を呼びましたし、1年間で150万人入館者を迎えまして経済効果も大変高い。問題はそれだけではなくて、この新しいコンテンポラリーアートを伝統的な友禅だとか丸谷焼だとか陶芸だとか、あるいは繊維産業にどうやって結び付けていくか。そういった現代と伝統を産業組織の上で結び付けていくようか試み。こういったことに政策の重点を置いている。この辺りが創造都市としての一つの大きなポイントになろうかと考えています。

一方で横浜という都市も2年前から「クリエイティブ・シティ横浜」という政策を取るようになりました。こちらの方は39歳で市長になられた中田宏さんという方が、従来の大型開発、大規模プロジェ

クトーこれは日本の自治体がほとんどバブル経済のときにやってきた大型開発ですーそれが破綻したあとで創造都市へ戦略をスイッチしたわけです。このときフロリダの説がかなり横浜に浸透しまして、そして銀行の跡地などをBank ARTと称してアートスペースにしましてアーティストやクリエイターを集める、クリエイティブ・クラスを集めてくるという政策を振興しております。

ここでの論点は市長が替わったときに創造都市戦略を採用しましたので、思い切って転換できる。そしてトップダウンで政策を振興することができる。しかし一方でその弱点があります。つまり、産業組織です。生産システムとこのクリエイティブ・クラスの結びつきがどうなるかということが未解決の問題として残っています。

関西の大都市圏ではどういったことが起きているか。お隣の京都では今年の4月に文化芸術都市創生条例という条例をつくり、創造都市の考え方を導入しております。このとき京都では金沢に近いやり方で、つまり京都という都市が蓄積していた文化資本、この厚みの上にコンテンポラリーアートを導入してきて、さらに町家を中心とする景観保全をやりながら、文化芸術という力で都市を再生しようという試みであります。

細かいことはちょっと省略しますが、そうしたところで出てくる問題点を二つほど指摘したいわけですが、一つは日本の伝統文化というものと現代のコンテンポラリーアートというものの中には大きなギャップがございます。そして伝統的なものづくりをしてきている伝統的な職人工房というシステムと、例えば現代のアニメーションだとかビデオソフトだとかというようなものとの間に大きなギャップがある。ここのところを先ほどのスコット先生の話でいけば、どのようにここを埋めるような政策が取れるのか。

それからとりわけ文化産業や創造産業における流通部門の問題です。これは日本では東京に圧倒的に集中しています。したがって東京一極集中という構造をこの文化産業、創造産業の流通の面で転換できないと、やはり東京の発展にしかつながらないとい

う構造が出てくるわけです。そうしたことがこれからの都市政策の上でチャレンジする課題として出てくるでしょう。

もう終われと言われてはいますが、大阪の話をして終わりたいと思っております。こういうことになろうかと思ひまして、もう少し長めのペーパーを用意して入り口に置いてありますので、大阪の現状を知りたい方はそちらをご覧ください。さらに私の新しい本が『CAFE—創造都市・大阪への序曲』というタイトルで出ておりますので、そちらをご覧ください。

しゃべっていると切りがないので終わりますが、大阪では四つほどこれから考えていただきたいことがございます。何と言っても市役所自体が官僚的な体質から抜け出して、創造都市をリードする柔軟な創造的行政に変わり得るかどうかなという問題と、市民の草の根からの創造都市をめぐるさまざまな運動が展開していくかどうか。こういったことをぜひ私どもは研究課題として掲げて創造都市研究科を中心に、あるいは都市研究プラザを中心に研究を進めたいと考えておりますので、海外の皆さま方も協力をいただいて、ぜひ実りある研究成果を上げたいと思っている次第です。どうもありがとうございました。

加茂： どうもありがとうございました。それぞれのお話はそう単純ではないのですけれども、これまでのところ創造都市とか、あるいはグローバル・シティというものの持っている、経済をより活力あるものにしていこうというポテンシャルと、それからその逆のネガティブな動きが進んでいくことに基づいて不平等だとかいろんな問題が発生してくるという側面、これもまた単純には議論できないのですけれども、それらをどう調整するかということがこれからの都市政策の課題になりそうだという話が、うっすら、ぼんやりと浮かび上がってきたかなという気がいたします。

ちょっと前半を終わらして、ここで15分間休憩を取りたいと思ひます。3時20分から再開したいと思います。先ほど私、英文ペーパーの全文を欲しい方に受付へどうぞと申し上げましたけれども、

既に売り切れだそうございまして、そんなこともあるかと思ひましてこの資料集の1ページの一番下に、この報告の全文をダウンロードするためのインターネットのアドレスが書いてありますので、どうしても全文を手に入れたいと言われる方はこれにアクセスしていただければちゃんと入っている、ひょっとしたら入っていないものもあるかもしれませんが、入っているはずでございますので、ぜひダウンロードしてお読みいただきたいと思います。

それでは3時20分まで休憩したいと思います。

(休憩)

加茂： それでは再開したいと思います。

セッションを続けたいと思ひます。パネリストの第3番目として香港大学都市計画環境管理研究センターのミーカム・ヌウ先生にお話をいただきたいと思ひます。

〇 冒頭発言 3

「グローバル性・持続可能性・創造性
：世界都市の競争」

ヌウ： 皆さんこんにちは。加茂先生ご紹介ありがとうございます。今日は「グローバル性、持続可能性、創造性」ということで九つの世界都市の比較についてお話を申し上げたいと思ひます。時間が限られておりますので、もうストレートに本題に入らせていただきます。



ミーカム・ヌウ氏
香港大学
都市政策環境管理研究所 助教授

・世界都市の比較研究

これは今制作中のペーパーでありまして、まだその都市の比較がうまくできていないところもございますけれどもご容赦ください。21世紀の都市ということを考える場合にはグローバル、あるいは世界都市になるということだけではなくて、持続可能な創造性豊かなクリエイティブな世界都市になるということが重要であると考えています。

そこで、その点についての理論的な枠組み、それからわれわれが方法論を使って評価を行ったこと、およびこれまでのところでできている暫定的な評価の結果についてお話しをしたいと思います。そして九つの都市を比較した結果、そしてその結果と結論について述べたいと思います。

皆さん方もよくご存じのとおり、世界都市といえますのはいろんなビジネスや公益の活動、金融の活動が収れんするようなビジネスの本拠地、その司令塔的な役割を果たす場所であるということです。

そして地域、あるいは国、あるいは国際的な経済をグローバル経済に組み込むようなところである。フリードマンは皆さんご存じのように都市というのはプライマリー・コア・シティ、セカンドリー・コア・シティ、それからセミペリフェラル (semi-peripheral) なシティに別れるというようなことを言っていますけれども、そのあとにほかのスキーマも続けております。

それからピーター・テイラーやその同僚らはラフボロー大学の人たちでありますけれども、その世界都市のネットワークが機能するというようなことを述べています。そしてそのネットワークの世界都市間でのつながり、例えば銀行のグローバルなネットワーク、メディアのネットワーク、あるいはエネルギーのネットワーク、そういったものがあって、そして主なセンター、それからマイナーなセンター、そういったものにも分けているわけです。そしてそれぞれにスコアを与えて α 、 β 、 γ というような形で世界都市というようなことで、その評価をしています。

・世界都市と持続可能性

しかし多くの学者は世界都市というのはあまり持続可能ではないということを言っています。そこで私どもの考え方といたしまして、このことを簡略した表でありますけれども、世界都市を持続可能な開発の原則を取っているのかどうかということで評価を試みました。

基本的にこの原則としては二つあります、一つはいわゆるわれわれにとって非常に必要なこととしての天然資源の利用に関してでありますけれども、そ

れが倫理的な形で利用されているのかどうかということです。基本的に世界都市というのは消費都市ですので、実際に天然資源を倫理的に使うということとはどのような生態学的な意味であれ難しいということが言えます。

それからもう一つ持続可能な開発ということで重要な原則は、世代間あるいは世代内の平等であります。世界都市というのはやはりこれも失敗をしています。これについてはまた後ほど数字をお見せいたします。

現在われわれの世界というのはあまり資源の活用ということに関しては平等ではないと考えております。数字によりますと、世界のトップ3の最も豊かな家族、3家族だけで1, 350億ドルに上る消費をしている。これは6億人の人たちが暮らせる額であるということが、ある分析の数字が出ています。そして人口的には少なくとも非常に大きな経済のGNPを占める、あるいは貿易であつたり、あるいは商業活動の中を非常に占める豊かな人たちが、そして消費活動においても、また非常に大きな公害の源となっているということでもそうです。

そしていろんなそのシナリオがあり得るわけです。最低所得の国あるいは集団、あるいは世界の人口の中で最も最下層にある人たちというのは5億人から8億人いるわけですがけれども、慢性的に栄養不足である。そして2億から20億の人たちが家に電話や電気がないということになっています。

ジョン・フリードマンは最初に世界都市の仮説を出した人ですが、実際に公共政策によって大きな違いが出ているということの結果的に言っています。持続可能な開発というときにやはりクリーンな生産、またその政策のプログラムを方法規制面、それからリサイクルに基づいたそのリソースの利用を最低限にしたような生産であるとか、そしてそのガバナンスでも公平さを保つというようなことが言われております。

・経済・社会的持続可能性

それ以外の持続可能な開発の原則といたしまして経済的な側面、例えば世界都市は長期的な経済繁栄を保障できるのかどうか、回復力のある経済を保つ

ていけるのかどうかといったような点もあります。こういったところに関しまして、私はクエスチョンマークを付けました。

基本的に資本主義が長期的に経済的な繁栄を保つことは難しいわけです。といいますのも、最終的に世界経済の発展の仕方を見ておきますと、これは常に非常に破壊的な市場における失敗が起こっているわけです。そしてエコロジカルな近代化、あるいは産業化でその生産プロセスを最小限にするということ。これは個々の都市によって随分違いがあります。都市によってはよくやっているところもあれば、そうではないところもある。違いが大きいわけです。

それから社会的な持続可能性ということでもいろんな原則があります。人の資源、文化的な多様性、あるいは基本的なニーズが満たされているのかどうか。多くの都市はこの点に関してはOKだと思います。ただ世界都市というのはいろんな種類の人たちが会合場所であり、そういう意味では多様性を高めている。そして文化的な創造性も高めているということが言えます。

しかしガバナンスの公平性あるいは社会的な結び付きました機会均等というようなことを言いますと、やはり多くのクエスチョンマークが付きまします。人々はこの世界都市の能力について対して非常に疑問を持っている、あるいは懐疑的であるということが言えます。

・環境・文化的持続可能性

それから環境面の持続可能性に関しましては、その地理的な公平性、あるいはその自然の収容力の中で生活しているのかどうかということ、これはもう全く意欲を得られていないと思います。世界都市は多くをその外部のリソースに頼って生き残っているかなければなりませんから。それから実際の環境はその生物多様性がむしろ高まるというよりはダメージを受けているということが言えます。ですので、リソースの利用を減らすとかリサイクルするとか、そういったことに関しましては非常にこの点は評価が悪いと思います。

文化や創造性ということに関しましては今までに多くのお話しがございましたので、私は手短にお話

しをしたいと思います。持続可能な世界都市というのは、原則があり、その都市の遺産や文化的なコンテキストの中で持続可能なのかどうかということも重要です。チャールズ・ランドリーが言ったように、参加型のプロセスプラス創造性が付いてくることが重要です。文化的な遺産を使って持続可能性を高める必要があります。

チャールズ・ランドリーが言うように、このクリエイティブ・シティのツールブックで二つのスキーマが述べられています。二つの種類の都市のイノベーションのマトリックスという形で出ています。いろんなカテゴリーで出ているわけですがけれども、これらのカテゴリーはシンプルに都市をマシンとして見る。そしてそこから収益を、お金を生み出すようなマシンとして見る見方です。

それからもう一つは生きた有機物として見る見方です。その独特な資産を持って前へ進んでいくものであるということで、そのパラダイムシフトがカテゴリーの実際面では進んでいるということが言われています。

さらに創造都市の開発のスケールを1から10まで評価尺度を付けています。すなわち全く創造性がない都市から、実際に自己批判的な実地的な創造力を持ったような人たちがいる都市まで評価をしているわけですがけれども、このスキーマテックは付けませんでした。われわれはさらなる研究活動のためには、こういった今まだ予備的なラフな主観的な評価をもう少し内容を充実していく必要があると思います。

・都市比較指標の整備

それから評価の基準に関してですが、チェックリストの問題点を上げてやっております。いろんな、こういった課題があつて、こういったプロセスがあるのか九つの都市で見えています。

それから都市に関しましてはいろんなインディケーターを使いまして持続可能性の側面を見えています。それから文化や創造性の側面、さらにグローバル化の側面について見てみます。われわれが検討した九つの都市でありますけれども、四つのよく知られた都市、すなわちニューヨーク、ロンドン、パリ、東

京、それからさらにアジア太平洋地域のシドニー、香港、シンガポール、台北、上海を加えました。ただ限界といたしましては都市レベルでのデータがそろわないというところが随分ありました。評価は可能かもしれないけれども、例えば私はフランス語も日本語も読めないということで、パリ、東京については言語面での制約が情報収集の際にはありました。

評価の方法論に関しまして今の段階では、まだ非常にシンプルで洗練されていないものになっています。評価ランキング付け、またいろんなインディケーターを使ってはおりますけれども、いろんなものがあり得るということで、これは必ずしも全部が全部今の段階で正確ということではないと思います。

時間が限られておりますので、手短かにスライドをお見せしていきたいと思えます。

まずバックグラウンドですけれども、人口と面積に関しまして上海は非常に多くの観点がこの中にあるわけでありますが、上海とシドニーを除きますと面積と人口の関係に関してはどの国も大体同じような形です。パリでは人口密度が随分高くなっておりまして、香港も随分人口密度が高いです。それから、ニューヨークと東京はGDPが非常に大きいです。しかし *per capita* のGDPになりますと東京が1位、次にニューヨーク、そしてパリとなります。ただこれは都市のデータというよりはフランス全体のデータから取ったものです。

それから経済構造ですけれども、ほとんどの都市は財務部門が主な経済活動となっております。上海は例外でありまして、GDP貢献度の40%がほかの部門になっています。それから工業部門、産業部門が上海の場合には全体の4分の1になっています。

政治形態に関してであります。非常に興味深かったのは九つの都市のうちニューヨーク、ロンドン、シドニー、東京、台北という多くの都市で、市長や市議会の人たちは民主的な形で選挙されております。またシンガポールの場合には、実際人民行動党が率いている議会民主制であります。それから香港は行政主導型の政治形態です。上海の場合には基本的には共産党主導型です。

なぜこういった政治制度に関して触れるのかと申し上げますと、私のプロジェクトに一定の過程を設

けているわけであり、われわれが議論しようとしているのは透明でアカウンタビリティのある、開かれた政治形態というものが重要なネットワークキングやパートナーシップづくりのベースであるからです。そしてそれによって共に学んだり、また社会的な能力の構築につながるのです。これが社会におけるクリエイティビティであったり、また持続可能性ということに必要なわけで、より世界都市であるということであれば、より民主主義であるのです。その権力が少数に集中しているのではなく、よりクリエイティブで持続可能であるはずで、それが過程であります。それを基に評価をしていっていると思えます。

あとは全部は読みませんが、基本的にこのように簡単に持続可能な戦略やプロセスが使われているかどうかということを示しております。いろんなクエスチョンマークとかチェック印であるとかバツ印が付いておりますけれども、例えば戦略があるとかリソースがきちんと持続可能な開発に向けられているとか、委員会がつくられている、そして政策を実行している、あるいはプロセスもきちんとあるというようなところにチェックが付いています。それからバツ印の都市ではそういったものは行われていないということの意味しています。

環境的持続可能性の側面に関しましては、まず生態系の面積について見ております。これはその都市の人、一人が持続可能な生活をするために、基本的に何ヘクタールが必要かということを示しています。これはロンドンで非常に高くなっています。次にシンガポール、そして東京、ニューヨークです。

しかし、工業廃棄物の排出量を見てみますと、ロンドンや東京、また台北におきまして工業廃棄物の一人当たりの排出量が少ない。しかしニューヨークや香港、シンガポールでは随分大きくなっています。そして排水処理のパーセンテージでありますけれども、香港ではあまり良くありません。しかしシンガポールでは、排水がほぼ100%きちんと処理されているということが言えます。

それから大気の状態でありますけれども、SO₂ と NO₂ に関しましてはすべての都市が良くなっています。しかし大気中の全浮遊粒子物質に関しましては、基

本的に工業都市である上海、それから香港（でよくありません）。香港は大気汚染のプログラムで有名です。その地域の開発のコンテキストと関係ありますけれども、シドニーや台北はボーダーラインぐらいになります。

それからがんと呼吸器系の疾患による死亡率でありますけれども、がんに関しましてロンドンと上海、東京はあまり良くありません。しかしながら呼吸器疾患の方ではちょっと驚くような結果ですけれども、大気の質が悪いと言われたところは死亡率がニューヨークやロンドンほどは悪くありません。

それから騒音に対する苦情の数ですけれども、ロンドンで非常に高くなっています。これは空港の騒音と関連しているようです。それから航空輸送を使った出張の比率、これは非常に重要なエネルギーの効率的な利用ということで必要でありますけれども、香港がいいです。それから次にシンガポール、パリと続きます。

それから移民の率ですけれども、多くの世界都市では香港、東京、シドニー、上海を除いてマイナスになっています。それからジニ係数でありますけれども、これは社会の二極化を示すようなケースで香港、ニューヨーク、シンガポール、上海と良くない都市です。それから社会保障の援助を受けている世帯の割合は、ロンドン、ニューヨーク、香港が高くなっています。それから生活費の指数は東京で高くなっています。次に香港、そして驚く結果ですが、上海でも高くなっています。それからこちらは医療費の世帯当たりの支出の割合、それから交通費でありますけれども、こういった医療費や交通費に関してはシンガポールとかは随分払っています。それから年間の平均労働時間、そして中・上級以上の教育を受けた人口は香港や上海ではあまり良くなっています。ロンドンやシンガポールでは教育の割合が高くなっています。

・都市革新マトリックス

アーバン・イノベーション・マトリックスは、クリエイティブ・シティ論でのものを使っております。そしてこれは三つに分けて考えております。これは論議のあるところだと思いますけれども、このまま

にしておきたいと思います。

西洋の都市というのはより革新的で創造性があるように見えます。そして次にシドニー、東京、それでアジアの都市のパフォーマンスはちょっと混在状態ではないか、あるいは十分な情報がないというような状況かと思えます。

それから文化的な側面ですけれども、上海、シンガポールがより多くの文化的な発展のための費用を充てています。上海は科学的な発展に随分お金を投資しているので高くなっています。それからニューヨーク、ロンドンでは多くの文化財指定建造物があります。アイコン的な建物が多いわけです。それはアジアの都市とは比べるべくもありません。それから上映映画本数、出版社の数、公共図書館の数、あるいは美術館の数、博物館の数で、ちょっと細かいところまでお話をしている時間はないのですが、アジアの都市はより映画の本数が多くなっていますし、台北の場合には出版社の数が抜きんでいます。

それから社会経済の中で国ごとの、これは都市の比較ではなく国ごとの比較なのですが、グローバルな競争力について見ています。こちらがランキングです。それからフォーチュン500の会社の本部のある数は、東京の次にもう認知されている三つの世界都市が続きます。それから商工会議所の数はニューヨークが一番高くなっています。それから国際銀行の数はロンドンに、また次に東京、シンガポールに多くなっています。それから都市が国際的な組織に属している数であります。香港と台北、これは政治的に随分国際的な場からは離れていて、加盟をしていないということが言えます。それから株式市場、国内市場の時価総額を示したものであります。取引株式数と国内企業の株式時価総額です。中には都市の情報が取れていないところもあるのですが、これはやはり著名なところのあとにアジアの都市が続いています。それから国債の取引価格の総額はロンドンが全く抜きんで、他の都市の追随を許していません。

それからISPの数、それからR&D、研究開発費は香港が高くなっています。ISP、インターネットプロバイダーの数はニューヨークが抜きんでいます。それから外国観光客の数は、国内の観光客

と両方を含めると東京が高くなっています。また台北、上海で両者を合わせた観光客の数は高くなっています。私の夫はこの結論を見て「ちょっとこれはどうも」と言ったのですが、私自身もこれを見たときにショックを受けたということを言わなければなりません。といいますのは、香港が一番最後、びりだったのです。

いずれにしても分かりましたことは、持続可能性のインディケータを使った結果ではロンドン、パリ、東京と、それから文化的な創造性はロンドン、ニューヨーク、パリ、そしてグローバル化の側面に関してはニューヨーク、東京、ロンドンという順でありました。これはまだ評価の方法論としては改善の余地が随分あるのですが、予備的なランキングということでの現状の反映としましては、ロンドン、東京、ニューヨークが上位に挙がったということがあります。

もう時間がなくなってしまったと思います。先ほどチェック印の入っていた表をお見せしましたが、やはり持続可能な開発についてのビジョンということではロンドンや東京がニューヨークよりも進んでいます。それが結論です。それから香港というのは、われわれ自身はグローバルな社会の中でのクリエイティブな存在と思っているのですが、スコアは非常に低かったです。これはインディケータの選択がまずかったのか、レーティングの仕方がまずかったか。それともわれわれの持った過程というのがむしろ正しく、より民主的な社会の方がより持続可能でクリエイティブな都市へつながるということが正しいということなのかもしれません。これはまた検証してみたいと思います。時間がなくなりました。ご清聴ありがとうございました。

加茂： どうもありがとうございました。これだけ九つの都市にわたってグローバル性とか持続可能性とか、いろんなインディケータをつかって体系的に比較する目安を与えてくださったのは、香港大学の研究センターの大変大きなデータベースづくりの成果だと思います。われわれの研究プラザはそういう方向に行くのかよく分かりませんが、とにかく非常に参考になりました。ありがとうございました。

それでは最後に、パネラーの一番最後で、アンネ・ハイラ教授のお話をいただきたいと思います。

○ 冒頭発言 4

「権利の明確化—アーバニズムへの挑戦」



アンネ・ハイラ氏
ヘルシンキ大学 教授

ハイラ： 技術的にはちょっと古いのですが、OHPを見ていただければと思います。私のタイトルですが、「権利の明確化と都市化：都市研究における課題」

ということでお話をしていきたいと思います。そしてこの財産権と利用権ということで、非常に文化にも関係があると考えております。この権利を定義するということでもありますけれども、いったい誰が権利を持っているのか、そして誰が所有しているのか、そして誰が活用するのかということをお願いしたいと思います。所有権および使用権ということです。

・中国都市と財産所有権

中国の都市のことからスタートしたいと思います。何も中国の都市がユニークであるということではありません。中国の都市を対象として研究されている方もたくさんいらっしゃるわけですが、中国で起こっていることに対して議論があり、そして非常に興味深いということでもあります。また西洋諸国においてもこれを検討する余地があると考えております。

なぜ私が中国に現在非常に興味を引かれるかという理由が二つあります。急速に都市化が起こっているという点と、それからメガ都市化が進行しているということが特徴であります。例えば西洋においては100年以上かかったものが、10年間でこういった急速な変化が起こっているわけです。また社会主義が、市場指向型のマーケット・オリエンティド・ソサエティに変わってきたということも興味があります。そういう意味での制度の変化ということについてもお話したいと思います。

中国において議論を招いている点ではありますが、例えば誰が財産権、あるいは土地所有権を持っているかということがあいまいなのです。非常に興味深いのは土地の所有、そして土地の管理についてですが、両方とも都市整備ということから起こってきております。都市整備が現在のところ、どのように社会的・公的な所有と使用権とを区分けするか。またこれは非常に資本主義的なモデルでもあるわけですが、そのことの意味について見ていくのが非常に興味深いと思うのです。新自由主義の影響で、この土地管理について所有のあいまい化状況が起こっているということでもあります。

都市研究を行っている中国人研究者の間では、なぜ都市において、土地・財産権があいまいであるのかということが論議されています。この問題への対策としては、プロパティ・ライツ、土地所有権についてははっきり定義をするべきだと言っているわけがあります。

なぜ中国でこのような問題が起こっているか、それが西洋社会においてもなぜこれが興味深いかと言いますと、使用権と所有権について、西洋諸国においてもアーバン・ライトが明確でないという点を指摘したいと思います。そして幾つかの定義の事例をご紹介します。

・国際的事例

最初の事例ですが、これは先住民にかかわる問題で、フィンランドにおいても同じであります。ラップ人とフィンランド政府との間での対立がありまして、ラップ人は自分たちの土地所有権を主張したわけでありまして、そして国連法によりまして、これが調停されました。環境運動が、こういうようなアクティビストたちが行動を起こすきっかけとなったのです。人権、財産権、知的財産の問題も出てきています。デヴィッド・ハーヴェイら、このような権利を主張する活動家が出てくるということは、彼らが新自由主義国の生まれであるということ、また新自由主義に関する諸個人の考え方の分裂が起こっているためだとも言われています。

権利にかかわる議論について話を進めます。都市における土地利用権でありますけれども、いわゆる

「囲い込まれたコミュニティ」という問題があります。つまりある人々の所有権が他者の利用権を限定することになるという問題で、幾つかの裁判事例もあります。

例えばマレーシアにおいては、囲い込まれた地域に住んでいるある家族が略奪に遭って、訴訟を起こしているという問題が出ています。それから米国においては、反ホームレス法というのがあります。つまり公園で寝る、あるいは公共の場を生活の場とすることを禁止する法律があるわけでありまして。これは、ホームレスの人々の生活とそのための空間利用をより難しくさせているような法律であります。

また都市で、例えば路上でのパーティーであるとかスケーターに関しても、この手の問題はいわゆる所有権と利用権の対立を生み出しています。ヘルシンキにおいても反ホームレス法というようなものがあります。ヘルシンキでは、例えばスケーターが使用しているスペースについて使用方法を限定するというような法律もあります。

それからまた別の例ではありますが、公共の場の活用の大きな変化が見られております。公共の土地があいまいに使用されてきたり、常識として共有地と考えられ、使われてきたけれども権利としてはあいまいであったためです。

・フィンランド：土地所有者としての政府

こういう土地の所有者というのは市であったりするわけです。例えばフィンランドであります。不動産に関しては三つの不動産会社を政府がつくって、そしてそれを最大限活用しようということをやっています。例えば私の大学は国立でヘルシンキにありますが、この政府がつくった不動産会社が賃料をわれわれに請求するようになりました。また都市も同じような問題を抱えています。最近ではいわゆる市が企業家として活動するというようなことをやりだしました。市の各部署、例えば図書館であるとかそういった施設に対して、その賃料を市の政府が請求するというようなことをやりだしました。ということで、公共の土地について、当事者たちの関係が変わってきているということが言えると思います。

そして新しい分野ではありますが、ヘルシンキ市は、

中央政府に周辺の市町村に対して国有地を市有地に併合するように、請求したわけでありませぬ。ヘルシンキ大都市圏にある都市に対して、政府が所有する土地を市に渡すように請求をしたわけだ。

また別の例でありますが、これは開発の権利ということで、都市計画の中で何が起きているかということですが、やはりここでも都市計画には大きな変化が見られました。もちろんもともとの制度の差があると思いますが、フィンランドの計画制度では、いわゆる開発権が自治体にあったわけだ。しかし現在ではコントラクト計画という形でありまして、権利の活用が変わってきたわけだ。例えば、都市計画でも政府の独占的な使用権が変わり、民間のデベロッパーが関与するようになりました。1999年に最初の事例が起りまして、民間とのパートナーシップを持って開発をしたプロジェクトがありました。こうしたなかで、いったい何が民であつて官であるかという問題も出てきました。また、開発権を都市が売らるようになってきました。フィンランドにおいては、これは非常に劇的な変化であると言えると思います。イタリアのある町では開発権を市場で売らるということをやっています。

以上、こういう事例を通して土地所有権・財産権のあり方が大きく変わり、権利の流動化を原因とする社会問題が発生していることを紹介しました。

・所有権・利用権・開発権：都市研究の新しいテーマ

所有権と開発権については、西洋においてもこのように大きな劇的な変化が起ってきたわけだありますが、この問題についてすでに結論があるのでしょうか、あるいはそれについて対立があるのでしょうか。所有権についてであります、西洋社会ではジョン・ロックの17世紀のストーリーですけども、都市と労働力のストーリーがあります。新たに出てきたロナルド・コースが提唱したものをご紹介します。非常に影響力のあるものでありますし、このような新しい考え方というのがまだ完全には現実化していません。しかしながら中国の事例でも、やはりこのロナルド・コースの理論に関しては、中国は非常に関心を持っているわけであり

ます。

ヘルシンキでは多くの学生が東欧から来ています。いわゆるポスト社会主義の国々でありますけれども、私の教室では新しい制度ということでストラテジー・オブ・コモنز（共有地戦略）という授業を行っています。新自由主義が、例えばこういった国々においてどのようにとらえられているかということですけども、中国においては政府が介入することに対する疑義が生じております。ここでの議論はすべてが市場で決定されるものであつて、その前提条件というのはオーナーシップと利用権の定義によって決まるものであると言われております。ですからもともとは誰の権利であつたかということには関係なく、政府が例えば一番交渉をしたいと思つているような対象者に対して与えればよいというような議論がでできます。

・結論

私が今日申し上げたかったことは、こういうことです。西洋社会においても利用権と所有権のあいまいさ、そしてそれを明確に定義しようというような動きがあります。ただこれは都市化に関連する重要な課題です。もちろん都市研究においてもこれは大きな課題となっております。都市はほかの都市をモデルとして見て、ベスト・プラクティスを見つけようとするわけだあります。ヘルシンキはサンクト・ペテルスベルグを一つのモデルとしています。例えば社会科学の中でも、また都市研究においても参考になるような都市を求めらるわけだあります。そしてシカゴ、ロサンゼルス、そしてヨーロッパの都市、そしてシカゴ派と呼ばれてるような学派がでできます。どんなパターンが見られるか、そしてどんなモデルであるかということを研究いたします。

私のペーパーの趣旨は、どういふふうには都市研究の中で比較をしていくかということです。例えば原型なのか、一般化されたものなのか、あるいはユニーク性があるのかということですけども、中国の都市を私が研究したときに所有権と使用権についてもやはり再検討しなければならないと考えつきました。なぜこのような大きな変化が、オーナーシップや利用権についての明確な定義を必要とさせるかと

いうことであります。このオーナーシップのモデルを使用し、活用するやり方がいろいろな当事者に広がってきているのです。都市計画、あるいは都市開発においては、中国でもやはり契約をして下請けをさせるというようなことが起こっているわけであり

ます。21世紀の都市研究において一つの課題となるのは都市生活で、また都市生活を研究する際にはこのような所有権、使用权に関して明確な再定義が必要であって、もちろん所有権だけでなく活用権、そして利用権はすべて関連があると考えます。開発権もそうです。

デヴィッド・ハーヴェイは「明け渡し請求を積み上げることによって」ということを述べています。内的な所有権をより明確な定義を行うことによって、経済または資本主義的な形で表現しようということでもあります。また、いわゆる構築物の環境における倫理性、そして団体としてのオーナーシップということも説明をしております。ありがとうございました。

加茂： どうもありがとうございました。われわれの基本的な常識といえましょうか、近代の農村にせよ、都市にせよ、市民革命のときに土地の改革が行われて、土地の私有権というものが確定される。それが土地をマーケットに乗せて売り買い、貸し借りできるような条件をつくって、それがまた都市の発展につながっていくわけです。そういうことになっていくのだという理解をしていたのですが、やはり今は土地の私有権というものを絶対視するというよりは、むしろ所有権と利用権、用益権を切り離して用益権の方をどんどん財産化して活用するというような傾向も出てきております。土地にまつわる、あるいは不動産にまつわる権利というのが、21世紀になりまして、すごく流動化してきているということで、いろんな意味で概念の再定義法的な考え方の整理ということが必要になっていることが大変よく分かりました。さて、それをどういう方向でやるのかというのがなかなか難しい問題でございますが、あとの議論の中で出れば幸いです。

では皆さん方のプレゼンテーションを受けまして、

ディスカスタントとして大阪市立大学都市研究プラザの矢作先生からコメントをお願いしたいと思います。

○ 討 論

矢作： 矢作です。スコット先生からキーノートスピーチがありまして、4人の先生から大変興味深いプレゼンがございましたが、この5人の方のプレゼン



矢作 弘氏
大阪市立大学
創造都市研究科 教授

テーションに1本のくしを刺すというのはほとんど不可能でございます。私は空間計画の点から都市の持続可能性ということを勉強しておりまして、今日のテーマが「21世紀の都市像」で世界都市、創造都市、それから持続可能な都市となっておりますが、創造都市論ということについても疎いものです。お話を聞きながらですけれども、次の議論につながりそうな問題提起を少しさせていただこうと思っております。

スコット先生の中にお話ございましたが、脱工業化社会ということが言われてもう随分時間がたちます。もう40、50年たつのかと思います。問題はこの間に先進諸国の都市の構造がどのように変容したかということにあるのかなと考えています。すなわち都市型の製造業が衰退をして、その一部は発展途上国に生産の現場を移し、疲弊したインナーシティの活力をどういうふうに戻すのか、それが都市再生の研究課題となってきたということです。

・都市のリーディング産業はバブル産業！？

この30年ぐらいの間、いかなる都市型の産業がその都市の再生を担ってきたかということですが、私が考える限りでは紛れもなく大規模不動産開発であります。スーザン・ファインシュタインという方が『ザ・シティ・ビルダーズ(The City Builders)』という本を2001年に書いておりますが、彼女は「先進諸国都市の都市再生というのは市場主義的な不動産開発先導型の都市再生であった」

と言っています。market driven property led urban regeneration と定義しております。考えてみましてもタイムズスクエアのニューヨーク、それからドックランドのロンドン、お台場・東京駅周辺、それから丸の内・六本木の東京、それから大阪駅の周辺、あるいは南の方、今日横浜の話がありましたけれども、みなとみらい、それから今日はLAからお客さまが来られています、L.A. Live、あるいはグランドアベニュー、ここは今都市型文化施設の開発で、ディズニーホールや大聖堂が建って宗教がいよいよ観光施設にもなっているようでございますが、そういう文化施設群ができると同時に高級住宅が造られ高級ホテルが建てられている。大規模再開発が行われているのがLAのダウントウンの現状でございます。それからウォーターフロント開発で、ハンブルグ、エジンバラ、リバプール。バルセロナの話もございましたけれども、バルセロナもオリンピックにかかわる不動産開発、それからアットマーク21というエリアにおける大開発、それからウォーターフロント開発というのが都市のエネルギーになってきたのではないかと。

どの都市においても都市再生は大規模な不動産開発先導型のメガプロジェクトに先導されてきたのではないかと考えているところであります。東京、大阪は昨今バブル気味になっておりますけれども、これも土地開発先導型経済の到達しているところであります。

以上の議論を踏まえて二つのことを申し上げたいのですが、まず一つは都市産業について申し上げたいと思います。ニューヨーク、東京などの世界都市も、それから大阪、横浜、あるいはサンフランシスコ、またそれ以下の人口規模の都市も、この脱工業化時代の都市経済を先導するリーディング産業は、今のところ見だし得ていないのではないかと考えているところであります。

少し象徴的な話をいたしますと、都市経済を新しい産業としてリードしてくれるのではないかとということで、期待がいわゆるニューメディア産業というのに集まった時代がございました。1990年代半ば以降でございます。残念なことにインターネットバブルがはじけた以降のシリコンバレー、ニューヨ

ーク、あるいはサンフランシスコのガウチ、あるいは東京のビットバレーと言われた辺りで、その後必ずしも90年代半ば以降ぐらいの活気を、元気を取り戻していないのではないかと考えているところであります。

ニューヨークですが、ご存じのように国際金融センターとして確固たる地盤を固め、同時にウォールニューヨークですが、ご存じのように国際金融センターとして確固たる地盤を固め、同時にウォールストリートに完全にどっぷりつかるという形で、ニューヨーク経済全体はいわゆる市況産業、マーケット・ドライブ・インダストリーというものに大きく依存しているのではないかと。よくファイナンス(finance)、インシュアランス(insurance)、それからリアルエステイト(real estate)の頭文字を取ってFIREと言いますが、ニューヨーク経済がこのFIREといわれる産業に所得の面で大きく依存しているということでもあります。したがってニューヨーク市の財政もこのFIREに大きく浸っているわけでありまして、したがってこのFIREがこけるとニューヨーク市の財政もこける可能性があります。

FIREという言葉には「勃発する」とか「発砲する」という意味があります。私はこのFIREに依存したニューヨーク経済というのは、大変構造的に不安定性を持っているのではないかと考えているところであります。

・二重都市をめぐる

それから不動産開発先導型の都市再生というのは、立ち退き、ディスプレイメントを引き起こしながら同時にジェントリフィケーションを加速しているというのが現実でございます。都市空間の分極化ということが起きているのではないかと。先ほどのスピーチの中でプレトゥセイユ先生がデュアル・シティについての異論をされておりました。「分極化論をクローズアップして語るやつは政治家とメディアだ」ということでもございましたけれども、私はメディアに30年ほどいましたのでいささか反論する資格があるのではないかと考えております。

確かに先生がおっしゃるような統計的にしっかり押さえるということが重要なのですが、起きて

いる現象の意味を読み解くということも大変重要ではないかと思っております。例えばアメリカで今、コンバージョンブームが起きております。ニューヨークでもシカゴでもLAでもそうです。LAではジェントリフィケーションのスピードがあまりにも激しいです。コンバージョンによって、ジェントリフィケーションが激しい。ディスプレイメントが起きている。したがってロサンゼルス市がコンバージョンを一時停止するという条例まで成立させたのは事実であります。

東京の山手線の内側ですが、かなり均質な都市空間のようにご想像される方が多いかと思いますが、東京の23区で大変格差が問題になっています。象徴的な現象としては、東京の北の方の区の足立区とか荒川というところでは、小学生のクラスの中の20%ぐらいが給食費を払えないというような話が出ている一方で、港区の方では超高級の分譲マンションが開発されていわゆるパワーエリートという人たちがそこに住んでいるといえます。これは明らかに現象として格差があるのです。先生がおっしゃるように、データのどこまで確認できるかという作業をしておりません。メディアにいたものの悲しさがでございますけれど、しかし現象の持っているイメージというのも、やはり私は大きいのではないかと思っているところであります。

・創造産業の虚実

都市型産業の衰退、それからそれを代替する新しい都市型の産業を見いだし得ないということは、ルーティン経済のグローバル化ということと関係があるのかなと考えます。今日は映画の話題が出ていましたが、映画も創造都市型産業の一つかなと思っております。昨今LAとかニューヨークの制作現場では海外制作をしており、映画制作の海外移転、ランナウェイ・プロダクション・プログラムと言っているようですが、制作現場がカナダとかオーストラリアとかニューヨークにどんどん移出しています。先ほどスコット先生はサテライト・プロダクション・ロケーションという言葉を使っておりましたが、これに当たるのかなと思ったりして聞いていたところであります。

次に都市の空間の話をしたと思うのですが、アンリ・ルフェーブルは『The Production of Space』という本の中で、「最近の資本主義の見いだす空間の質は、大規模な不動産開発が作り出す多数の似たり寄つたりの空間の、際限のない生産によって特徴づけられる」と述べております。ガラス張りの超高層ビルとか、あるいはコンビニエンスストア、郊外住宅団地、郊外のショッピングセンター、典型的にはビッグ・ボックス・ストアと言われてたりするものに象徴される、いわゆる金太郎あめ、英語ですとクッキーカッターと言うそうですが、似たり寄つたりの空間が作りだされるのが今日の特徴だということのようであります。

それに対してマニユエル・カステルは『The City and the Grassroots』という本の中で、同様に「今日における都市というのは場所の意味を失っている、喪失している」ということについて書いています。その場所の意味を奪還する、取り戻すための都市社会運動、アーバン・ソーシャル・ムーブメント、特にサンフランシスコの事例を書いておりますけれども、こうしたアーバン・ソーシャル・ムーブメントが必要ではないかと言っているわけであります。それからドレス・ハイデ。彼女はUCLAにいたのでスコット先生はご存じかもしれません。今はイェールにいるようですけれども、『The Power of Place: Urban Landscapes As Public History』という本を書いております。場所が持つ社会的な記憶、パブリック・ヒストリーという言葉を使っていますけれども、「場所が持つ社会的記憶という視点から、均質化してやまない空間の背後に沈殿している、それぞれの都市に固有の空間を探り出し、その意味を読み解き、それをまちづくりの糧にする試みが必要である」ということを彼女は書いています。

5分ほど残してコメントをこのぐらいでやめようと思います。以上のようなことを感じながら聞いておりました。以上です。

○質問と討論

・脱工業化か創造都市か？

加茂： 5分残していただき、ありがとうございます。

ではこれからパネルディスカッションで、ちょっとやりとりをしてみたいと思います。討論者の矢作さんがコメントされた中で一番中心的な問題というのは、実は創造都市とか世界都市とかいろいろ言うけれども、いわゆる脱工業化が進んで以来、都市というものを引っ張るリーディング産業というのはなくなってしまったのではないかということでした。結局のところ、すごく投機的な不動産開発だとか何とかが、実は都市の中心的な経済活動になってしまって、その結果としていろんな社会問題が生まれる。やはりデュアル・シティというか、都市の二重化・分極化という問題も事実として否定することのできない問題として発生しているのではないかという問題提起をされたわけです。

この二つの問題を中心に議論したいと思います。

この間私のところに「世界経済フォーラム」、いわゆるダボス会議の年次レポートが送られてまいりましたが、今年の特集のタイトルが「クリエイティブ・エコノミー」なのです。つまりダボス会議のような世界のネオリベラルの人たちの会議でも、これからの経済というものを動かしていく最大のファクター、付加価値を生産して経済に活力を付け成長力を付けていく最大のファクターは、もちろん物的生産でもなければ、不動産開発でもない。やっぱりいわゆる知的財産というか、コグニティブなカルチャーというか、そういうものをベースにした付加価値の生産力ではないかということです。創造性が経済にとっては極めて重要な意味を持つという共通認識が出てきているように思われます。これはスコット先生や佐々木先生が強調された創造都市論とどこかで重なり、どこからかは違うのだろうという気がするのです。

矢作さんの問題提起を受けて、まずこの間、都市のリーディング産業なんていうのはなかったので、結局非常に投機的な不動産開発か、それとも創造都市と言っているけれども、あんまり実体のないシンボル経済か何かで多くの人たちは酔いしれてきたことになるのではないか。そういうふうになると非常に辛辣な話になりますけれども、これはどこかで議論してみるべき、かなり切実な問題だという気がします。矢作さんの問題提起を受けてスコット先生と

佐々木先生にちょっとコメント、レスポンスをお願いしたいと思います。

・論点1 創造経済の実体

スコット: 矢作先生に対してのコメントをさせていただきたいと思います。非常に興味深く伺いました。非常に重要な項目を幾つか挙げていただきましたし、それについてディスカッションしていかなければいけないと思います。

まず脱工業化ということでありすけれども、それは今日の午後議論をしている内容にかかわることだと思います。単に脱工業化経済というだけではなく、さらにわれわれはいわゆるポストフォード主義を見ていかなければならないと思います。現在新しい経済秩序が出てくるわけでありまして、ただ単に「脱何々」ということではないと思います。「ポスト何か」ということではなく、いったい何が起きているかということこれから考えていかなければならないと思います。

具体的にわれわれが目の前に見ているものはいったい何なのか。つまり成長、開発、革新、そして創造性、またGDPの成長というものを見てきたわけですけれども、現在それらにさらに今度は認知、文化という要素が加わってきたわけです。認知文化という、例えばハイテクの産業、例えばいわゆる新職能的な産業、金融、ビジネスサービス、また文化産業、そしてメディア産業、そういった中には一つの特徴として革新性をもたらし、審美性を追求する、そしていわゆる象徴的な価値を商品の中に入れて込んで出す、いわゆる交流という形でのものを出すということでもあります。

こういったものが私どもの経済の中で非常に起きていることでありまして、ホワイトカラーの部分とブルーカラーというもの、つまりルーティン化産業で、例えばホワイトカラーの方の方でいけば財務、経理、オフィスサービス、それから金融産業、金融サービスというのがだんだんなくなってきたわけがあります。またブルーカラーもそうです。労働階級といっても現在の資本主義の中では新たなものが生まれてきている。つまり都市化と非常に大きくかかわっているわけがあります。

単に新しい、いわゆる認知文化産業の中に移動したというだけではなく、今日話が出てきている中にはすべてこの要素が含まれていると思います。新しい都市化、新しい都市の機能というものが生まれてきているわけであり、これはこの20年、30年の間に徐々に出てきたわけであり、そして非常にそれが明確化されてきているわけであり、そしてまたグローバル化とそれらが組み合わさって出てきています。

矢作先生がおっしゃった中にはちょっと理解しきれない点があり、完全に理解したとは言えないのですが、以前の産業都市の再活性化ということをおっしゃっていたと思うのです。しかし、例えば政策決定者が単純に経済成長をさせようということで、新しい位置に移転させるというだけではすまない。各都市、各地域は特徴があって、その地域の地理性であるとか歴史といったもの、また特異性といったものを加味した上で開発していかなければなりません。しかしそこに新しい経済が顕著に大きな変化を生み出していると言えます。英国のマンチェスターが一つの例であります。

このマンチェスターというのは、この15年、20年で非常に大きく変容を遂げています。それからドイツのルール地域においてもそうであります。古い工業化地域であったわけであり、そのランドスケープや経済機能といったものが非常に大きく、劇的に変わった地域であるわけです。

さらに土地開発についても述べたいのですが、土地開発については確かに非常に重要な部分であるとは言えます。でも単純に土地開発というのは抽象的な意味だけではなく、具体的に幾つかのプロジェクトと関連させて、いわゆる文化認知的な価値をもたらすことができます。特に大都市においてフラッグシップ的なプロジェクトとして常に世界の中にその存在感を見せ、都市としてのアイデンティティをその経済秩序の中で経済の中心、文化の中心であることを示しています。ここ数年間シドニー、サンパウロ、そして上海、シンガポール、また大阪もそうだと思うのですが、こういった地域では夢を持っています。つまり文化創造的な経済力をグローバルに示したいという夢を明確に出していると思

います。そして理想としてある程度神秘性を持たせながら、真の意味での変化の一つの現れであるかもしれません。

それから場所の持つ力ですが、もし私が言っていることが正しく、本当であれば、世界において違ったランドスケープが生まれてきていると思います。あらゆる種類のいわゆる認知文化的な経済また社会というのが出てきていると思います。そしていわゆるこの認知文化経済は重要な役割を果たしていると思います。

われわれが現在経験的に目にしているのは、こうあるべきであるという理論を考えれば、一つの場所が別の場所とは違っていいはずで、多面的な、いわゆる中心が一個所ではなく多数のセンターがあって、そして文化がそれぞれの場所で生まれてきます。そして経済議論においても、競争、チェンバレンのような競争が生まれてくるはずで、そしてある意味では、確かにグローバル化というのは新たな19世紀からの競争であるわけですが、競争の形態というのはグローバル化によってチェンバレン的競争となっているわけであり、それは認知的な文化経済にベースを持っていると思います。

ですから非常に複雑でチャレンジングな疑問がわれわれの前に出てきているわけであり、新しい種の理論的なアパラスが必要であります。つまりいわゆる規範として、また現実的なアパラスが必要な状況になってきていると思います。

加茂： 申し訳ありませんが、ここから質問に対する答えは3分ぐらいでお願いできますか、佐々木さん。

佐々木： では時計を見ながら。私は今スコット先生が言われたこととの関係でいきますと、いわゆる場所の力とか場所の固有性の背後にあるのは、いうところの固有価値、イントリンシック・バリューと言いましょか。そういったものが、このグローバル化の中で非常に浮き上がってきているのではないかと考えております。実はスコット先生も使われている文化経済という領域、あるいは文化経済学、カルチュラルエコノミーズという領域においては、こ

のイントリンシック・バリューというものはつきり認知するかどうかということがとても大きな問題になってくると思っています。それは今日十分話せなかったことなのです。

例えば今大阪で起きている問題で、大阪の新しいアートシーンというものは、かつて造船所で使われていた廃墟、木津川沿いの造船所跡が新しいアートシーンとしてよみがえっております。それからバブルの時代に地上げでお寺の数がどんどん減るのですが、そのつぶれそうになったお寺の場所がアートスペースになってよみがえっておりますし、それから普通の病院の病室の中でアートスペースが生まれてきているということなのです。その造船所跡だとか、あるいは壊れかけたお寺、廃れたお寺の場所の固有性を見い出して、そこに新しい価値をもたらすものというのがアーティストの力です。まさに場所の固有価値を発見するということが、文化経済の中心的なテーマになってきていると思います。

片方で政府、特に日本の政府が進めてきた都市再生政策というものはいったい何であったかと考えてみますと、これは都市政策という名前を借りた、先ほどの矢作先生の言葉で言いますと「FIRE産業の救済策」だったわけです。実はバブル崩壊以降この15年間、日本の金融不動産、あるいはゼネコン、特に金融業界は日本初の世界恐慌を引き起こすか否かという瀬戸際をずっと歩いてきました。それでFIRE産業が先導する都市再生をやったのではなく、このお荷物になっているFIRE産業を救済するために取られた経済政策が小泉内閣の都市再生政策だったのです。都市を再生するというのが本来の目的ではなくて、大都市、特に東京の地価を回復し、それによって関連業界の息を吹き返す。そしてそれが世界恐慌を食い止めるという政策。つまり残念ながら日本には、最近では都市政策なき都市再生だった。こういった、まさに都市の固有価値というものに立脚した、あるいは場所の固有性、場所の固有価値というものに立脚した政策とはいわば正反対のものが起きている。

実はグローバル化とかローカル化と言われているものの中にはこういう二つの正反対の力がずっと働いていて、都市というのはまさにそういったものが

闘争しているアリーナなのではないかと私は考えております。

加茂： ありがとうございます。これに関連してアンネ・ハイラさんにちょっと質問したいのですが、さっき言われた土地に関する権利概念の流動化の問題がいまご指摘のあったような不動産開発、都市再開発がものすごい規模で起こり始めたということとどこかで関連しているのでしょうか。そう考えるか否かで権利概念の再整理の仕方が違ってくると思うのですが、いかがでしょうか。

ハイラ： そうです。そういったことを先ほども言わんとしたわけです。例えばヘルシンキ最大のメガプロジェクトというのは、都市と民間のデベロッパーとの間のプロジェクトなのです。ですので、私の言わんとしたポイントというのは、このようなジョイントの企画を官民の間で一緒にやっていくということで、非常に大量な契約関係が発生してくるわけです。そしてその契約を結ぶに当たって、いろいろな利用権、あるいは所有権といったもの、これまでにははっきりと定義されていなかったようなものを再定義する必要が出てきたということです。こういった契約を作成していくために、より排他的な形で利用権あるいは所有権というものを定義していく必要があります。そうでなければこういった所有権のモデルというものを消化することができないということでもあります。

特にヘルシンキにおきましては、公的なストリート、通りを開発しているわけであり、これが今一部民間所有地になってきているというようなところがあります。かつては公共の道路であったところは、常に公共の道路であると前は考えていたわけでありましたが、しかしこれは今もう民間のスペースで、もはや公共の道路ではないと人々は意識し始めているわけです。

そういう新しいタイプの契約ベースのアーバン・プランニング、都市プランニングといったものは、単に利用権であるとか所有権といったものを再定義するというだけでなく、それを見る人々のモデルとしての考え方や受け取り方といったものにも

影響があります。そしてそれはまた跳ね返って、利用権であるとか所有権をより排他的にしていくということが、より自然であるというような見方になってきているということです。私の研究の中ではもうちょっとこれを掘り下げてやっているわけでありませぬ。フィンランドの私の都市におきましてはこれが今自然なことだと受け取られていて、実は非常に大きな変化がここで起こっているのだということはあまり一般には認識をされていません。そしてそれがアーバン・プランニングに関連して、またメガプロジェクトに関連して起こってきているということでもあります。ありがとうございます。

・論点2 二重都市モデルの評価

加茂： ちょっとシフトしたいと思います。やはり矢作さんから出た問題でございますが、いわゆる格差構造というか、創造階級の興隆というのか分かりませんが、とにかく今日の都市経済の変化に伴って二極分解、都市の社会階層の二極分解、あるいは所得構造の二極分解というようなことがどんどん進んできて、ようやく日本でも正面から認識され始めたのではないかという気がします。

それに対してプレトウセイユさんはそれほど単純なものでもなかろうとおっしゃったわけですが。日本では国勢調査で所得が把握できませんので、本当に所得構造が変わっているのかどうかというのはよく分からないのです。いってみれば自分は中流だと思っているか、上流だと思っているか、下流だと思ってくるかという、そういう意識構造みたいな形ではか調査ができないというような問題があったわけですね。

そういう意味で確かにデータのどこで確かめられるかという問題がやっぱり残るのですが、プレトウセイユさんはじめ何人かの社会学者、都市学者が欧米の都市について調べたところでは、ちょっとこれは創造都市論の、特にリチャード・フロリダなんかの考え方と近いのかも分かりませんが、全体としてむしろグローバル・シティやクリエイティブ・シティが広がっていくにつれて、都市の階層構造というのはトータルなアップグレイディングというか、中より上の層が増える。それに引っ張られるようにし

て中間や下の人たちの地位も上がっていくという形で変化をしているのではという見方が出てきた。決して二極分解、真ん中がガタンと小さくなるというような変化になっていないのではないかという見方で、プレトウセイユさんはそのことを言われたのだと思います。この研究はデータの的には、実証的にはどの辺まで進んでいって、矢作さんの質問にどういうふうにお答えになるのでしょうか。

プレトウセイユ： ご質問ありがとうございます。非常に刺激的で、また難しい点であります。明確にしておかなくてはならないと思うのですが、私が申し上げたこの二重化のモデルに対する批判は、職業の分析、スキル構造であるとか、あるいは分業体制の中で人々が行う仕事はどうなっているのかといった分析に基づいたものです。所得の議論というのは、ややそれとは異なる議論になってきます。

所得分布は自動的に職業構造から翻訳されるものではありません。これは職業構造をもって、その間にいろんなメカニズムが介在して翻訳をされるものです。その一つのメカニズムは労働市場でありましょうし、また相対的にある種の労働力が不足しているといった状態を見るということです。また、この労働市場というのは政治的に組織化もされています。その機能の仕方というのは、市場における集団的なプレイヤーの相対的な力にもよります。そして政治家がそれに対して有効な規制が打ち出せるかどうかといったようなことにもかかわってきます。

ですので、こういった職業構造であれば賃金水準がどのぐらいであるといったような、自然な成り行きとしての定義はないわけです。それから職業構造を所得へと転換していくに当たりましては、国家の果たす役割というのも考えなくてはなりません。国家は労働市場の規制面のみならず、その所得を財政政策や社会政策や必要対策等々を通して再分配するという点でも非常に大きな役割を果たします。

どのぐらいの所得があるのかというデータに関しては、いろんな総数の集計としてのものはあるのですけれども、その中には労働者の賃金や社会的なトランスファー（移転部分）から税金を引いたものが入っています。経済のメカニズムは複雑で、非

常に強力な政治的な性質も入っています。ネオリベラルな理論家たちの多くの議論というのは国家という概念を組み入れてはいないのですが、職業構造の動向を見ますと技術のグローバル化、またその労働組織形態といったようなことから、ますます国家間で類似性を高めているように思われます。しかし賃金の分布状況についてはそうではありません。といいますが、政治的な状況が国によって違いますからです。労働の分業は相対的にフランスとドイツの間、あるいはインドと中国の間では似ているかもしれませんが。しかし賃金の分布状態というのは随分違います。

われわれがヨーロッパをアメリカと比較しますときに、常にヨーロッパの場合は国家の役割が不平等さを制限するというような方向で働いているというのを見ることができます。これは国によって違いはあるのですが、フランスの場合なんかでもそうです。アメリカとは随分違います。それに対してアメリカの場合はそういうケースが随分少ない。それで職業の変遷と賃金の変遷に相互関連はあるのですが、別々にデータも登録されているということで見なくてはならないと思います。

加茂： われわれがいつも困るのは、例えばクリエイティブ・クラスというのを言うときに、どういうカテゴリーの職業に属している人がクリエイティブ・クラスかということ、フロリダのクリエイティブ・クラス論の場合には定義があるのです。それを日本に 응용して比較しようと思ったらそういう統計がないわけで、カテゴライズをし直さないといけない。昔は産業の分類そのものも、例えばさっきFIREという話が出ましたけれども、金融・保険・不動産という形で分類をしているような統計と、それから全くそうではない日本の事業所統計の産業分類というのは全然違いますので、それをどうやって比較するかというのは非常に難しい問題です。ですから本当のところ正確な比較、正確な実態というのはどこまでつかめるのかはまだまだこれからの課題かなという感じがいたします。

そういう点でぜひミーカム先生にお伺いしたいと思うのですが、あれだけ九つの都市のインディケー

ターを集めて比較をされたわけですがけれども、その中で例えばこういう社会的な階層構造とか分極化、二極化みたいなものの状況を比較されて、どういふ図柄が浮かび上がってくるのかというようなことについての調査はされたのでしょうか。もしあったらお聞かせいただきたいのですが。

ヌウ： 社会的な側面をインディケーターで見ていたわけですがけれども、持続可能な開発ということはとても重要であります。そして社会の持続性、そしてエクイティであるとかガバナンスは主要な要因であると思います。そして社会的な構造だけではなく、いわゆる社会的なインディケーター、例えば社会的な二分性というもので、例えばジニ・コエフィシエント(Gini coefficient)を見ていますし、それから所帯差というものを見てきています。それからそのほかのインディケーターも活用いたしました。そして社会的な状況の評価を行っています。例えば政府からの支出であるとか、いろいろな側面でどれだけ支出がされているかということも評価いたしました。

そこで私どもは今さっきおっしゃったように、いろいろな統計を取ったわけでありませぬけれども、意味ある統計を取りたかったのです。そういうような統計が現在はないわけです。そういう観点から見るような調査がないのです。ですから都市によっては、こういった分野の情報は全く入手していないというような政府もあるわけです。香港で私どもは持続性にかかわるようなインディケーターを開発いたしましたして、香港がどのような持続可能な開発をやっているかということの評価するためのインディケーターも使って評価をしています。ですから新しい分野、社会開発で、これが一つのスタートポイントだと考えています。そして社会の持続性に関してはこれからも持続していきたいと思っております。

・論点3 空間論の意味

加茂： 先ほどからいわゆるスペース論とか、空間論の話が出てきています。矢作さんの問題提起は、要するに空間の意味というのが都市の中で失われてしまって、そういう意味で空間というものをよ

りどころにした人々のアイデンティティが失われてしまったという、大変大きな問題があるというのがマニュエル・カステルの問題提起だったという話だったと思います。それに対して佐々木さんの答えは、そうではなくて空間の意味というのは変わっていくのだと。つまり古い空間のシンボリックな意味というのは失われるかもしれないけれども、新しい意味をそこに付与することによって空間というものの機能も意味も変わっていくので、そういうことがうまく行われることによって都市の生まれ変わりが進んでいくことになるのではないかというお話だったのではないかと思います。

昨日香港フォーラムで「希望のスペース」という話が出ましたけれども、そういうことが今の世界の多くの都市で起こっているならば、今の変化の中に非常にポジティブなモーメントを見いだすことができます。しかし特に勤労者にとってどんどん空間の意味が失われていくということだと、これは絶望的な感じもします。その辺の見方はかなり佐々木さんや矢作さんの間では微妙に食い違っていた気がするのですが、もう一度議論のし直しをしてみただけですか。

矢作： アメリカの、例えば商業施設のことなんかを調べていますけれども、いわゆるウォルマート現象というのがアメリカを席卷しているわけです。さっきから出ているウォルマート現象というのは、やっぱりグローバル化と情報化の相クロスするところで生まれているわけです。ここで出ている空間の意味から言うと、街空間の均質化ということが問題になっていまして、やはりボトムアップ型で住民サイドの方の方から空間の均質化に対する反対というのがあって、それぞれの自治体で最近では随分条例をつくって、このボックス・ストアとかあるいはチェーンレストランというものの立地を規制するということが始まっています。やはりそういう市民レベルの覚せいがあることが「スペース・オブ・ホープ」なのかもしれないと思います。以上です。

佐々木： 今の話で私が特に大阪という場所を考えると、大阪の原風景というのをどこに見いだす

かというので、いろんな意見が出てくると思いますし、私は大阪生まれではないので勝手なことが言えるのですが、やはり原風景の一つは上町台地という辺りでしょうか。かつて日本で一番古い四天王寺というお寺があり、そしてこのお寺は四つの機能を果たしていました。病院の機能と、セトルメントの機能と、学校の機能と、そしてお寺の機能です。加えてお寺は勸進興行とってアートスペースでもありました。実はその上町台地というのは日本で一番お寺の多いスペースです。つまり大阪というのは寺内町です。この筋からいきますと。この寺内町にあった大阪のさまざまな柔らかい人間関係というのが大阪の文化資本としてある。その文化資本の上にさまざまなものがコンクリートで積み重なって見えなくなっている。そういったものをもう一度呼び起こすというか、読み替える、意味を解きほぐすといいたいでしょうか。そういう作用自体が都市を創造的にしていくということにつながるのではないかと私は思っているわけです。

加茂： ありがとうございます。既に予定された5時という時刻は過ぎておりますが、あと10分いただきました。大変短い時間で申し訳ないのですが、フロアの方からもしご質問なりコメントがございましたらお出しいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。1分30秒ぐらいでお願いできれば幸いです。

はい、どうぞ。

・フロアとの応答

フロア発言1： スコット先生にちょっとお尋ねしたいのですが、この大学にはヴェルナー・ゾンバルトというベルリン商科大学の先生の蔵書が保存されております。ゾンバルトは20世紀初頭に奢侈、ぜいたくが資本主義を持続させると言ったわけですが、21世紀に入りましてゾンバルト先生のおっしゃったことが通用するように思うんです。ロサンゼルスにはロデオドライブがありますし、ニューヨークにはマジソンアベニュー、フィフスアベニュー、パリにはサントノーレ。大阪の心齋橋にもサントノーレと見まがうようなコーナーがございます

が、ゾンバルト説というのは21世紀にもやはり通用していくものでしょうか。またそれに伴う格差というものも考えられますけれども、先生のご意見をお伺いしたいと思います。

スコット： 私もゾンバルトに同意します。ゾンバルトはとても著名な理論家でありますが、この問題を考えますと、より正確にこの問題を表現するならば、これはエンゲルの法則だと思います。アーネスト・アングルス（エルンスト・エンゲル）は、ゾンバルトと同じ時期の人物です。そしてエンゲルの法則というのは、所得が少し上がる、その少し上がったのに並行して消費が上がるというのではなく、かなり大きく上がると言っています。ですから確かに所得が上がると消費のパターンも変わるということは確かだと思います。これをさらに詳しくは申し上げませんが、同時に技術的かつ組織上の変化があり、生産、製造にかかわるような変化が起きてきたわけでありまして。そしてやり方も変わってきました。ですから両方とも確かに見ていかなければならないと思います。どうもありがとうございました。

フロア発言2： ご発表の中で、アンネ・ハイラさんの都市の権利の明確化を私は大変興味深く思いました。それと関連して近代都市というのは基本的に、おっしゃられるように中国の研究者が言っているようですが、個別の空間というものを私有化するということにこの特徴がある。しかし他方では、非常に皮肉なことに都市の外部性、つまり距離的な近接性、地理的な近接性による外部性というものがあって、その外部性というのを享受しない限り、工業化された、あるいは脱工業化も含めて、そういった都市というのは成立しないという矛盾があります。そしてその外部性を享受するためには、皮肉なことに近代市民社会の所有権というものを否定しないといけない。つまり一方では近代市民社会の所有権というものをプロモートするのが、まさに都市が成り立っている市場経済ですが、他方ではそれを否定しなければいけないという弁証法的な存在が都市なのです。

それで今日のご報告の中でもちょっと出てきたキーワードで、私は非常に重要だと思うのですが、ネオリベリズムというのがあります。ネオリベリズムでは、その弁証法的な矛盾というのがどういふふうに解決されようとしているのだろうかということが、私が非常に興味があることなのです。

一つは私の考えでは、外部性というものがまさに非常にネオリベリズムを支配しているその立地にだんだんアプロプリエイトされて、吸収。収奪されていくようなプロセスなのではないかと思えます。その中で個人的な土地所有がむしろ失われていく。中国なんかは国有ですから、都市再開発は上海なんかを見ても分かるように、一番簡単にできるわけです。中国人の研究者が言っていることとまさに逆のことが行われていると思うのです。

これは私の質問というよりも感想を述べさせていただくということですが、今後のネオリベリズムの中で、都市の外部性というのが誰に持って行かれようとしているのか。その中でオルタナティブな都市と考える場合に、それをどうやって取り戻さなければいけないかということが21世紀の都市において重要な一つのストラグルのテーマになってくるのではないかと、私は本日のご報告をいろいろ伺っていて思いました。感想を述べさせていただきました。

加茂： ありがとうございました。

はい、どうぞ。

フロア発言4： ミーカム・ヌウ先生にちょっとお尋ねしたいと思います。今日のご報告は持続可能性ということから創造都市を見ていくという、非常にデータも豊富で大変面白く、興味深くお聞かせいただきました。例えば日本の中では環境都市という名称で、日本国内の幾つかの都市を毎年1回コンテストするということをやっている事例はあるのですが、今までの創造都市の世界レベルで、そういうものは今日実は初めてお聞かせいただきました。それで国連のアナン前事務総長がグローバルコンパクトということ定義して、その中でまちづくりについてもその原則を適用するというのを提唱されたと思います。実は、ヨーロッパで幾つかその事例が出てお

りますけれども、アジアにおいてそのことを意識したまちづくりと申しますか、グローバルコンパクトに基づくシティづくり、そのようなデータというのはどこかにあるのでしょうか。先生がこれまで調査された中で、それを意識した形で取り組んでいる街があれば教えていただきたいと思えます。

ヌウ： ご質問ありがとうございます。申し上げましたように私は日本語が読めませんので、環境都市といったようなことに関しましては日本の状況をよく知らないです。コンパクトシティというEUの提唱している概念を、基本的なアジアの都市の構想に生かしたような例があるのかどうかというご質問でしょうか。何かそういう事例があるのか、あるいはベストプラクティスのような事例があるのかどうかというご質問ですね。

香港は典型的なコンパクトシティであります。持続可能な設計というよりもむしろコンパクトのコンセプトの方を言われております。設計ということに関しまして、多くのアジアの都市というのは実際はかなりコンパクトです。例えばヨーロッパの多くの都市と比べますとそうです。その意味で、われわれの地理的な特徴、また歴史的な経緯から、アジアの多くの都市がその都市構想計画において、韓国の都市も、日本の都市も、あるいは台湾でも、また多くの中国の都市もそうだと思いますけれども、かなりコンパクトです。

しかしコンパクトな都市というのは必ずしも持続可能都市とイコールではありません。といいますのも、持続可能性ということの中には単なる物理的な開発の原則が入るのみならず、ソフトのインフラ構造、ガバナンスの構成、制度、組織、あるいは参加型のプランニングのプロセス、そういったことはもう先ほど出ましたが、またパートナーシップを促進し奨励する、そして環境面での持続可能性をフォーカスして、伝統的な産業、工業、生産、プロセスに対してチャレンジをするというようなことが随分入っております。

それでファクター4ということをお聞きになったかどうか分かりませんが、あるいはまたファクター1.0という言い方もありますけれども、同じような

開発をやってもエネルギーの消費率を4分の1、あるいは10分の1に減らしていこうといった提唱活動があります。ですので、単なるフィジカルな意味での開発、都市をよりコンパクトにつくるというだけではなく、そういうことが入っています。

都市のオーガナイズの仕方に関しましてもエネルギーの効率を上げる、あるいは生産に関しましてもよりクリエイティビティが問われます。単に自然環境を破壊しないということだけではなく、生産過程においても、あるいはまた都市のオーガナイズにおいてもより自然環境を高めるような、エコロジカルな近代化を高めていくようなやり方をしていくということが入っています。

そういう意味では、実際にコンパクトシティということは実践されていると思います。香港も一つの例です。これは地理的に、また歴史的な発展の経緯からそうなっていると思います。そういう意味ではより持続可能な形であるし、またより長期的に持続可能性を持った都市になっていると思います。私はそういう見方をしております。お答えになったかどうか分かりませんが。

加茂： いよいよ5時15分で時間が切れてしまいました。こういう種類の大型の国際シンポジウムの宿命かと思えますけれども、いろんなスピーカーの方がいろんな角度からお話をいただいて、それに対してコメントやディスカッションが出るので、三日三晩ぐらいやらないとお互いに満足のいく結果にはならないというのが、経験則で分かっております、そういう意味では大変消化不良で問題点を残したかもしれません。

都市研究プラザといたしましては、今日のこのシンポジウムを出発点にして、ここで出ましたいろんな論点をなるだけ紹介して、それを論点としながらこれからの研究活動を進めていくと同時に、こうした国際的な研究交流のようなものを少しずつ質的に発展させていきたいと考えております。本当に長時間お付き合いをいただきました、ゲストスピーカーの先生方にお礼を申し上げたいと思えます。それから決して易しくはなかったと思うのですが、本当に長時間たくさんの方々に聞いていただきましてわれ

われは大変ありがたく思っております。本当にありがとうございました。

それでは最後に都市研究プラザの専任研究員でございます、水内先生の方から一言ごあいさつを申し上げて終わりにしたいと思います。

水内： 壇上の皆さま、どうもありがとうございました。また会場の皆さま、本当に長い時間お付き合いいただきましてありがとうございました。何か気の利いたことを言えということでございますけれども、加茂先生のご配慮により20分ほどオーバーいたしました。しかし本日皆さんにぜひとも見ていただきたい施設がございます。都市研究プラザもう入っております高原記念館というのが、本学の向こう側に一号館のキャンパスがありまして、その時計台の横にたぶんこの時間ですと電気がともっておりますので、非常に幻想的な建物になっているかと思えます。たぶん大阪市立大学のイメージが全くない、行っただけであれば、ちょっと現代美術館風のガラス張りの建物となっております。そちらで今大阪市大の都市研究のさまざまな蓄積を総結集したポスター展示をやっております。21世紀の都市像をそこからつかみ取ることができるかというよりは、どちらかというと大阪市大の研究は対症的なところがちょっと多いので、なかなかそこから夢を見いだすことは難しいかもしれませんが、ぜひともご覧いただきたいと思っております。

そしてまたその場所に都市研究プラザがございます。部屋も仕切りも全くございません。所長もいつも外から丸見えという形で、ドアも何にもないところで机だけで座って皆さんに対応するという、新しい形の大学を考えておりますので、その一端もご覧いただければと思っております。

壇上の皆さまもちろんと見ておられないかと思えます。私たちがご案内いたします。三々五々下の玄関を下りていただいたら、皆さんをご見学にお連れしたいと思います。それを含めて今日のシンポジウムのトータルを理解していただきたいと思っております。本日はどうもありがとうございました。

これから徐々に下りていただきまして、同時通訳の機械をお返しいただいて、忘れ物なきよう行って

いただきたいと思えます。下の方で係の者がお待ちしております。三々五々お連れいたしますので、どうぞ皆さんぜひともご参加ください。どうもご苦労さまでございました。

REFLECTIONS ON THE CREATIVE CITY

Allen J. Scott,
University of California,
Los Angeles

アラン・J・スコット 01

ECONOMIC STRUCTURE AND URBANIZATION

- 1. The factory system: the classical factory town
- 2. Fordist mass production: the large industrial metropolis
- 3. Post-fordism, the “new” economy, cognitive-cultural capitalism: the creative city.

アラン・J・スコット 02

THE COGNITIVE-CULTURAL ECONOMY

- DEROUTINIZATION OF LABOR PROCESSES
[New division of labor: Levy and Murnane (2004)]
- 1. Digital technologies
- 2. High levels of scientific/technical labor
- 3. Human intermediation of services
- 4. Symbolic outputs
- 5. Aestheticization of commodities

アラン・J・スコット 03

Specific forms of cognitive- cultural production and work:

- Neoliberal technomanagement
- Innovation-oriented production
- Privatized provision of information/services
- Naturalization of socially-useful aptitudes (in educational institutions and the media)
- Commodification of experiences

アラン・J・スコット 04

Plus:

- Deroutinized low-wage work:
- Small-batch assembly
- Machine operators (e.g. driving a vehicle)
- Security and maintenance
- Hotel and restaurant trades
- Janitorial work
- Childcare

- Widening divide

◀ アラン・J・スコット 05

Attempts to map out social stratification in the new economy

- Bell: Post-industrial society
- Gouldner: The new class
- Reich: Symbolic workers in the information economy
- Sklair: Transnational capitalist class
- Florida: The creative class

アラン・J・スコット 06 ▶

(Flawed) theorizations of the cognitive-cultural order

- Managerial discourse: flexibility, fast capitalism, human capital, empathy, creativity, adaptability, etc.

- Urban policy discourse: consumer city (Glaeser), entertainment machine (Clark), creative city (Florida, Landry).

◀ アラン・J・スコット 07

TOWARD – AND BEYOND – THE
CREATIVE CITY

The driving forces behind urban agglomeration and growth

1. Networks of specialized but complementary producers
2. Local labor markets: skills, socialization
3. The creative field: learning and innovation, i.e. creativity is always mobilized in concrete ways (textiles industry, car industry, film industry)

◀ アラン・J・スコット 08

アラン・J・スコット 09 ▶

Clustering is a locational strategy by means of which producers transform latent benefits into concrete competitive advantages

- Increasing returns to scale
- Agglomeration economies
- Monopoly powers of place (product differentiation and branding; Chamberlinian competition)

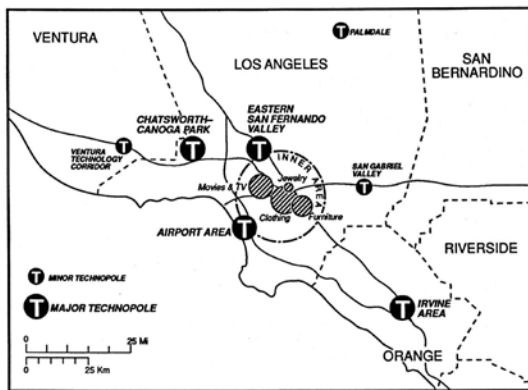


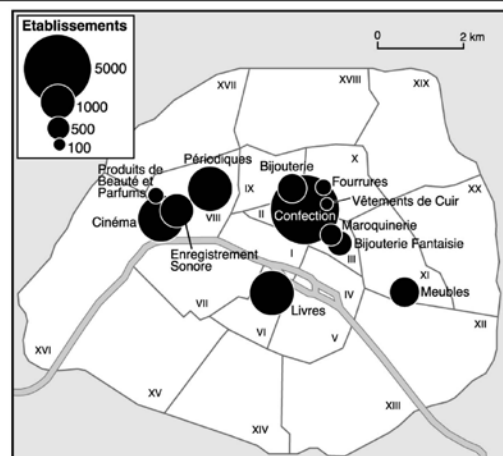
Figure 1: Principal Industrial Districts of the Greater Los Angeles Area

◀ アラン・J・スコット 10

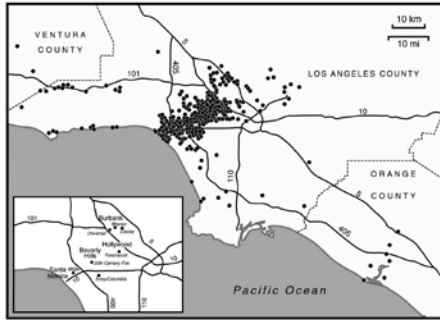
ロサンゼルス産業地域

アラン・J・スコット 11 ▶

パリの産業地域



Motion-picture production companies in Southern California. The inset shows locations of the majors and selected place-names



◀ アラン・J・スコット 12

南カリフォルニアにおける
映画産業の分布

アラン・J・スコット 13 ▶

A new balance between work, life, and leisure in the city

1. Interpenetration of upgraded production space and gentrified social space
2. Proliferation of cultural/entertainment facilities (Clark: "Entertainment machine")
3. City of the spectacle
4. Iconic architecture and recycling of the built environment: Bilbao Guggenheim, Westergasfabriek, Petronas Towers, London Docklands.

Richard Florida's formula for achieving the creative city

Attract the creative class by:

Investing in amenities

Encouraging tolerance, openness and
diversity

◀ アラン・J・スコット 14

アラン・J・スコット 15 ▶

Anti-Florida:

1. The complex production machinery of the city
2. The spiral of cumulative causation in city growth
3. The impossibility of sustainable growth in the absence of employment opportunities
4. The privileged role of productive activity in the spiral of interdependencies

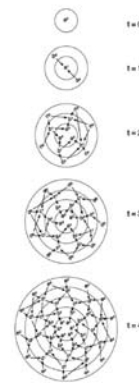
The example of Silicon Valley

- 1. 1950s: Fruit growing
- 2. Initial planting of high-technology seed.
- 3. Disintegration, spin off.
- 4. In-migration of semiconductor engineers (NOT undifferentiated creative class)
- 5. Growth of market and defense spending
- 6. Cumulative causation

◀ アラン・J・スコット 16

アラン・J・スコット 17 ▶

シリコンバレーの発達



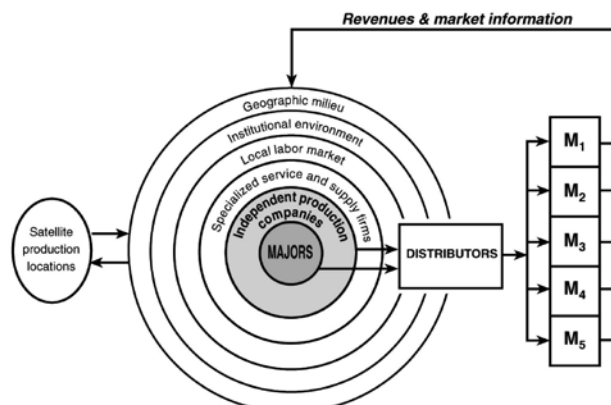
THE POLICY PROBLEM

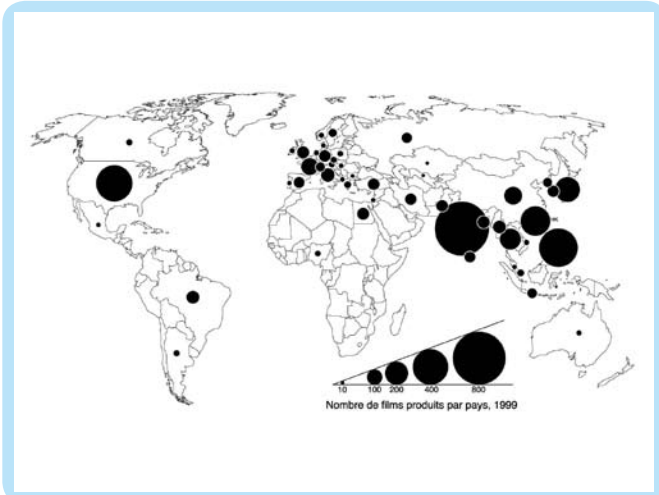
1. Bottom up
2. Harvest external economies (networks, labor markets, innovation)
3. Sustain milieu
4. Institution-building in the interests of regional coordination: internalizing externalities

◀ アラン・J・スコット 18

アラン・J・スコット 19 ▶

認知文化経済の産業集積





◀ アラン・J・スコット 20

世界の映画製作数分布

The dark side of the dialectic:

アラン・J・スコット 21 ▶

- Sweatshops
- Underclass
- Immigrant, often undocumented, labor
- Social segmentation
- Widening divide

- The decline of community
- The withdrawal of public services
- The retreat of the public sphere

◀ アラン・J・スコット 22

Beyond the creative city and the creative class: tasks ahead

アラン・J・スコット 23 ▶

- From neoliberalism and consumer capitalism to social democracy
- Citizenship, community
- Solidarity, sociability, political community
- From the “creative city” to the convivial city

日本における創造都市と政策的課題

大阪市立大学都市研究プラザ副所長
佐々木雅幸



Dr. Masayuki Sasaki
Professor of Osaka City University

Master course of Urban Policy

創造都市 パルセロナ

— Universal Forum of Culture 2004

- Universal Forum of Culture 2004
21世紀の新たな文化万博
- 無数のアートイベントと「グローバルな対話」
世界フォーラム「文化権と人間発達」



1. 「世界都市」から「創造都市」へ

- グローバリゼーションと知識経済化が生み出す
新しい都市類型

9. 11事件が転機となる

「世界都市」→9.11→「創造都市」	
<i>Global City</i>	<i>Creative City</i>
垂直的支配構造	水平的ネットワーク
金融センター	創造産業
バブル経済	都市の持続性
社会的リスク	「創造の場」



大阪市立大学創造都市研究科
都市経済学入門講義 4614711
佐々木雅幸 Masayuki Masuyuki

1. 「世界都市」から「創造都市」へ

- グローバリゼーションと知識情報経済化が
生み出す新しい都市類型

「世界都市」とは「金融・経済・文化の中核的機能を独占し、グローバル経済の頂点に位置する都市であり、その内部には富と貧困の極端な格差を抱え、文明の衝突の焦点に立つ都市である」

「創造都市」とは「市民の創造活動の自由な発揮に基づいて、文化と産業における創造性に富み、同時に、脱大量生産の革新的で柔軟な都市経済システムを備え、グローバルな環境問題や、あるいはローカルな地域社会の課題に対して、創造的問題解決を行えるような『創造の場』に富んだ都市である」

大阪市立大学創造都市研究科
都市経済学入門講義 4614711
佐々木雅幸 Masayuki Masuyuki

1. なぜ、文化と創造性が都市政策の中心に立つのか？

New Trends for Creativity

知識情報経済への移行に伴い、「創造性」がその推進力になる。
人間創造的活動への注目、
芸術的創造性と技術的創造性のシナジー効果。



A5

1. なぜ、文化と創造性が都市政策の中心に立つのか？

Cultural Economics J.Ruskin

芸術作品に限らず、およそ財の価値は本来、機能性と芸術性を兼ね備え、消費者の生命を維持するとともに人間性を高める力を持っている。このような本来の価値(固有価値)を産み出すものは人間の自由な創造的活動、つまり仕事work(ラテン語でオペラ)であり、決して他人から強制された労働labor(ラテン語でラポール)ではない。本来の固有価値は、これを評価することのできる消費者の享受能力に出会ったときにはじめて有効価値となると主張した。

1. J.ジェイコブズと創造都市

「創造都市」のモデルとしてのポローニャ

- 中小企業主体のフレキシブルなネットワーク型経済
- 職人企業を軸にした充実した支援システム
- 脱大量生産の「職人的ものづくり」
- 職人工房と町並み保存
- 芸術文化と福祉の担い手としての非営利組織(協同組合)
- 環境再生とサステナブル・シティ

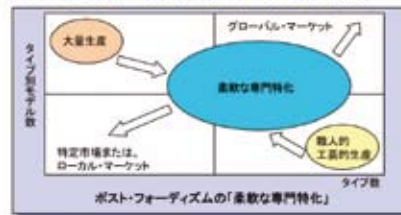


職人企業を軸としたネットワーク型経済
2023年4月撮影
ポローニャ市立芸術館
ポローニャ市立芸術館
撮影 佐々木雅幸

A7

1. ポローニャの職人経済

- ポストフォードイズムとは
- フレキシブル・スペシャリゼーションとは



- 「第三のイタリア」とは、職人企業とは

P.ホールの創造都市・歴史理論

Hall, P.,

Cities in Civilization, London: Phoenix, 1998

◇世界史の画期を代表する都市を歴史的に配し、各都市における経済的繁栄と文化的栄華との関わり、文化的増殖と創造的環境creative milieu、さらに絶えざるイノベーションを可能にする革新的環境innovative milieuを分析し、芸術と技術の融合、そして、都市のガバナンスのあり方にまで及び、人類史における都市文明のパノラマを展開している

C.ランドリーの創造都市政策論

Landry, C.,

The Creative City : A Toolkit for Urban Innovators,
London: Comedia, 2000

◇都市問題に対する創造的解決のための「創造的環境」creative milieuをいかにして作り上げ、いかにそれを運営していくのか、そしてそのプロセスをいかにして持続的にしていくのか、実践的に「創造都市をつくるための道具箱」を提供するコンセプチュアルな「創造都市政策論」となっている。

3. 高まる「創造都市」への関心

- 「創造都市」←「欧州文化都市」の成功から
芸術文化の創造性を活かしたポスト工業化時代の都市再生
- 「創造産業」への注目
音楽・映像・マルチメディア産業などのクリエイティブ・クラスター
- 創造的コミュニティと新たなライフスタイル
→アヴァンギャルドな芸術とハイテクとの結びつき
- 「知識創造産業」と「知識経営」

3. アメリカの創造産業、創造経済、創造階級の特徴

- R. Florida, *The Rise of the Creative Class* 2002
現代経済の担い手として「創造階級」の登場と勃興に注目し、そのエートスと仕事およびライフスタイル、そして彼らが選択するコミュニティの特徴を分析し、創造階級が好んで居住する都市や地域こそ、経済的パフォーマンスが優れていることを「ハイテク指標」と「ゲイ指標」の相関で示す。
「超創造的中核」①コンピュータ・数学、②建築・エンジニア、③生命・自然科学および社会科学、④教育・訓練・図書館、⑤芸術・デザイン・エンターテインメント・スポーツ・メディア
「創造的専門職」①マネジメント、②ビジネス・財務、③法律、④保険医・技師、⑤セールス・マネジメントの各専門職種

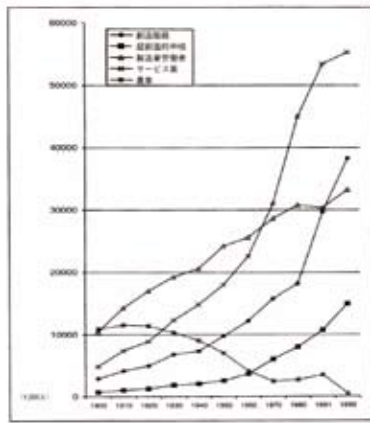


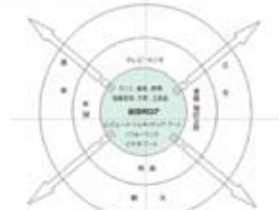
図2 創造産業の増大(1900-1999)

(出所) 図1に同じ。

5. 創造産業による都市再生

- 「創造産業」とは「個人の創造性、スキル、才能を源泉とし、知的財産権の活用を通じて富と雇用を創造する可能性を持った産業」

音楽、舞台芸術、映像・映画、デザイナー・ファッション、デザイン、クラフト、美術品・アンティーク市場、建築、テレビ・ラジオ、出版、広告、ゲームソフト(双方向の余暇ソフト)、コンピュータ・ソフトウェア



国土交通省都市政策研究所

大阪府立大学創造都市研究センター
都市経済学入門講義 144/171
講師 佐々木 雅幸 Masaki Miyazaki

創造産業の日英比較 Creative Industry Japan v.s.UK

産業分野	雇用		市場規模	
	日本(人)	英国(人)	日本(10億円)	英国(10億円)
舞台芸術	58,200	34,300	49	93
美術・書畫	23,500	37,000	85	648
映画	71,288	44,500	1,807	868
音楽	118,002	122,000	2,143	851
工芸	29,800	23,700	385	74
デザイン	48,881	16,000	865	4,842
ファッション	4,500	11,300	25	110
IT/コンピュータソフト	350,223	955,000	10,723	6,734
ゲームソフト	25,000	21,500	1,218	183
出版	180,285	140,800	4,815	3,423
放送	130,800	102,000	5,738	2,239
広告	154,281	82,800	10,188	2,960
建築	12,500	28,900	3,008	313
合計	1,408,788	1,312,000	38838	23238

1. 「創造都市」の定義

- グローバリゼーションと知識情報経済化が生み出す新しい都市類型

「創造都市」とは

「市民の創造活動の自由な発揮に基づいて、文化と産業における創造性に富み、同時に、脱大量生産の革新的で柔軟な都市経済システムを備え、グローバルな環境問題や、あるいはローカルな地域社会の課題に対して、創造的問題解決を行えるような『創造の場』に富んだ都市である」

2. 創造都市の6条件

第1に、芸術家や科学者が自由な創造活動を展開するのみならず、労働者や職人が自己の能力を発揮してフレキシブルな生産を展開することによって、グローバル・リストラの荒波に抵抗しうる自己革新能力に富んだ都市経済システムを備えた都市である。

第2に、都市の科学と芸術の創造性を支える大学・専門学校・研究機関や劇場・図書館などの文化施設が整備され、また、中小企業・職人企業の権利を擁護し、新規創業を容易にし、創造的仕事を支援する各種協同組合や協会など非営利セクターが充実して、創造支援インフラストラクチャーとして機能している都市である。

大阪府立大学創造都市研究科
創造都市論 第7講 2013.06.07
佐々木雅幸 Masaki Masuyuki

2. 創造都市の6条件

第3に、産業発展が都市住民の「生活の質」を改善し、充実した社会サービスを提供することによって、環境、福祉医療、芸術などの領域での新しい産業の発達に刺激を与えるような産業活力と生活文化、すなわち生産と消費のバランスのとれた発展をしている都市である。

第4に、生産と消費が展開される空間を規定する計画権限を持ち、都市環境が保全され、都市住民の創造力と感性を高める都市景観の美しさを備えた都市である。

2. 創造都市の6条件

第5に、都市住民の多様で創造的な活動を保障する、行政に対する住民参加のシステム、つまり、狭域自治と、地域の広域的環境管理を担当する広域行政のシステムを備えた都市である。

第6に、創造的自治体行政を支える財政自主権と政策形成能力の高い自治体職員を擁する都市である。

大阪府立大学創造都市研究科
創造都市論 第7講 2013.06.07
佐々木雅幸 Masaki Masuyuki

2 日本における創造都市の取り組み

内発創造都市・金沢の挑戦

- 伝統的街並みと職人工房・伝統芸能
- 内発的発展がもたらした金沢経済の特徴
文化的生産の都市へ
- 文化の保存から創造へ
市民芸術村の試み
- 人間的規模の歴史都市を「創造都市」に
金沢創造都市会議



写真の引用 金沢市民芸術村のWEBサイト
<http://www.artvillage.jp/index.htm>

2. 金沢経済の内発的発展史

①内発的発展の基礎確立期

- 羽二重生産の開始と桐生産地
- 力織機の改良とからくり技術

②戦後の高度成長期

- 化合繊維物(ナイロン・ポリエステル)と超自動織機の生産

③グローバルリストラによる危機と再構築

- 繊維産元商社の危機と内発的ハイテク化
(機械工業のメカトロ化)

2. 内発的発展がもたらした構造的特徴

- ①自律性の高い本社経済
- ②産業と技術の地域内相互連関
- ③独自の産地システム
- ④伝統産業・アメニティ・都市景観
- ⑤利潤の域内循環と生活文化ストック(文化資本)

2.金沢の市民が守る文化と環境



老舗・文学・ロマンの会の活動

2.都市景観保全とまちづくり

- 伝統環境保存条例(1968年)
 - ・区域を指定
 - ・土地建物の区画形質の変更を届出、指導助言、勧告
- 美しい景観の形成に関する条例(1989年)
 - ・景観形成基準を設定
 - ・景観審議会を設置
 - ・建造物等の高さ、色彩等を指導

2. 都市景観保全とまちづくり

こまちなみ保存条例(1994年)



用水保全条例(1996年)



斜面緑地保全条例(1997年)

北海道立大学都市計画研究科
都市計画学 第1講 2013年9月
佐々木雅幸 Masaki Masuyuki

2. グローバル・ニッチ・トップ ——小さな大企業とハイテク職人

株式会社高井製作所

事業内容 <http://www.takaitofu.com/index.htm>

1917年に設立された日本で最初の豆腐・豆乳製造装置メーカー



連続豆乳投入プラント
「ミラクルサンダー6000」



バッチ式豆乳製造装置
「ソイオートΣ2000」



スクリーン搾り機
「シリウス」

写真引用: 株式会社高井製作所ホームページより

北海道立大学都市計画研究科
都市計画学 第1講 2013年9月
佐々木雅幸 Masaki Masuyuki

2. グローバル・ニッチ・トップ ——小さな大企業とハイテク職人

株式会社石野製作所

事業内容 <http://isr-net.com/>

寿司コンベア機全国納入実績No.1メーカー



写真引用: 株式会社石野製作所ホームページより

北海道立大学都市計画研究科
都市計画学 第1講 2013年9月
佐々木雅幸 Masaki Masuyuki

2. 伝統産業のルネッサンス

株式会社箔一

事業内容 <http://www.hakuichi.co.jp/top.htm>

箔の生産から、箔工芸品のデザイン開発、製造、あぶらとり紙の商品製造販売



写真引用: 株式会社箔一ホームページより

北海道立大学都市計画研究科
都市計画学 第1講 2013年9月
佐々木雅幸 Masaki Masuyuki

2. 伝統産業のルネッサンス

株式会社福光屋

事業内容 <http://www.fukumitsuya.co.jp/index.html>
本酒、酒粕の製造販売

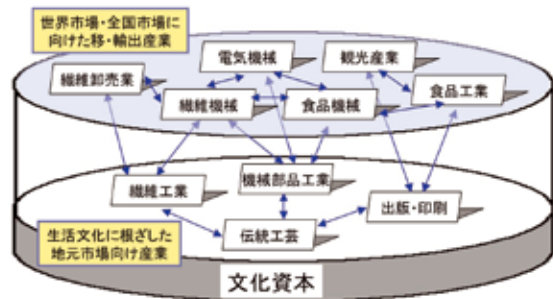


写真引用 株式会社福光屋ホームページより



大宮市立大学経済都市研究科
都市政策学 第4講 2013/06/14
佐々木雅幸 Yasuki Yamazaki

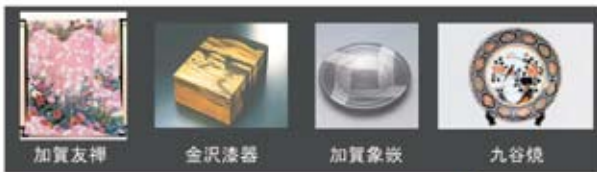
文化資本の集積を活かした金沢産業の新展開



4. 文化的生産の都市・金沢

職人的工芸的生産 ⇒ 近代的大量生産 ⇒ 文化的生産

「質の高い文化資本の集積を活かして
都市経済の発展をはかる新しい産業発展の方式」



大宮市立大学経済都市研究科
都市政策学 第4講 2013/06/14
佐々木雅幸 Yasuki Yamazaki

3. 文化の保存から創造へ 金沢市民芸術村の実験

- 「世界工芸都市会議」
- 職人的なものづくりの精神をまちづくりにも生かす
→ ポローニャとの職人交流
- ふらっとバスの導入
→ ポローニャ視察の成果



金沢市民芸術村



ふらっとバス



職人交流

大宮市立大学経済都市研究科
都市政策学 第4講 2013/06/14
佐々木雅幸 Yasuki Yamazaki

5. 金沢創造都市会議の開催へ

▶ 金沢世界都市構想(1995年)

「地球的な規模で、小さくとも自らを主張しうる、独特の輝きを放つ都市」

▶ 金沢創造都市会議(2001年から)

金沢経済同友会による提唱



金沢市立大学創造都市研究
創設都市論 第4講 2003/07/24
佐々木 雅幸 Yasuki Yamazaki

6. 現代アートによる都市再生・産業創造へ

空洞化した都心部に、現代アートを中心とした21世紀美術館を新設することにより、新文化・新産業の創出と都心再生を試みる。



金沢市立大学創造都市研究
創設都市論 第4講 2003/07/24
佐々木 雅幸 Yasuki Yamazaki

7. クリエイティブ・シティ・ヨコハマへ

横浜市 一大規模なウォーターフロント開発の挫折に直面し、「芸術文化特区」による都市再生を目指す。とりわけ、横浜市は2004年1月

「クリエイティブ・シティ・ヨコハマ」構想を発表し、4月には文化芸術都市創造事業本部を置き、**全国初の創造都市推進課**を設置して、5,000人のアーティスト・クリエイター、30,000人の創造産業従業者からなる創造産業クラスターの形成を目標に掲げている。

BankART1929(バンカート1929)



旧第一銀行横浜支店



横浜都心部の歴史的建築物を活用した、アートNPOによる文化芸術創造の実験プログラム「BankART1929(バンカート1929)」

▼ 佐々木 雅幸 37



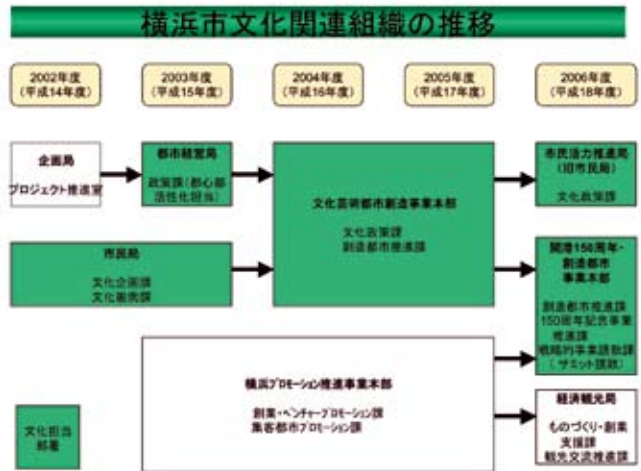
▼ 佐々木 雅幸 38



▼ 佐々木 雅幸 39



▼ 佐々木 雅幸 40



創造都市としての京都の可能性

- ✓「文化芸術都市創生条例」(2006年4月)
- ✓創造都市としての京都の可能性
- ✓文化資本の蓄積と異文化の導入
- ✓景観保全への取り組み
- ✓伝統工芸と現代アート



4. 創造都市としての京都の可能性

その1: 西陣の空き町家から始まる都市再生の動き

西陣町家倶楽部の活動

<http://www.machiya.or.jp/>

町家の仲人の集議を通じた京町家の物件紹介(町家の創設ではありません)。
 ・西陣を中心とした町家有効利用紹介とネットワーク西陣の紹介
 ・情報公開・コミュニティスペース「町家倶楽部」の運営
 ・インターネットを通じて、町家倶楽部や西陣を中心とした地域の情報を発信



町家クラブホームページより

4. 創造都市としての京都の可能性

その2: 横のつながりを生かした職人仕事の再構築

▶ほんもの座 奥田祐斎

千年前、天皇の御物にだけ使われていた「黄磁染」という染物の技法を再現した「伊賀磁染」を開発した染物師。良心的な職人や小売店を集めた「ほんもの座」というグループを立ち上げ、消費者が買いやすくなる流通の革新にも取り組む。

▶職人館



職人館ホームページより

4. 創造都市としての京都の可能性

その4: ITを活用した伝統職人の挑戦

(有)ジャパンスタイルシステム <http://www.js-kyoto.jp/>

CG製作ノウハウを持った主婦職人が、数十年前に創られたその感性やノウハウを使い、「CG支援支援」の製作、景観を切り口に出来た様々な職人や客のニーズに応じた商品やサービスを提供し、デザインに溢れる手仕事や職人技を伝えています。



(有)ジャパンスタイルシステムホームページより

4. 創造都市としての京都の可能性 その5:創造的行政への転換の兆し

京都芸術センター

<http://www.kac.or.jp/>



京都芸術センターホームページより

3. 大阪の再創造をめざして

➤すすむ空洞化

大企業本社と主力工場の流出

➤高まる雇用不安と経営危機

倒産とホームレスの増加

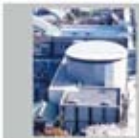
➤萎える企業家精神

中小企業の高い廃業率



3. 上方文化の再創造をめざす

- 企業メセナの衰退 近鉄劇場、扇町ミュージアムスクエアの閉鎖
- NPOによる新しい文化支援活動の胎動
- 應典院、フェスティバルゲート、アーツアボリア(築港赤レンガ倉庫)、精華小学校



3. ネットワーク型産業集積へ

➤大企業の脱大阪化

→地域固有の産業クラスターの構築

ナニワ企業団地(Mインダストリー、町工場の宝物)

東大阪・ロダン21、京都・試作ネット、アドック神戸



Yu&Sana ホームページより
<http://www.m-industry.net/yu&sana.html>

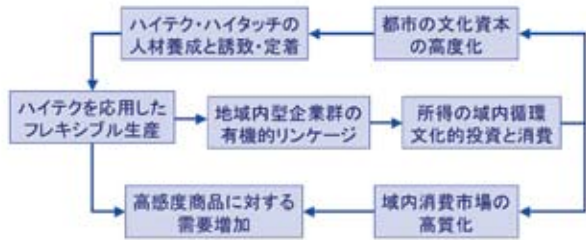
創造産業のインキュベーション Incubator for Creative Industry

- ▶ 空洞化による遊休施設を創造支援インフラに転化する
- メビック駒町
- 芸術創造館
- 産業創造館



大阪府立大学創造都市研究センター
創造都市論 第1講 (2019/04/22)
佐々木 雅幸 Yasuaki Sasaki

都市における文化的生産モデル



「創造都市への挑戦」図3-1

「創造都市」を創出するために

第1に、直面する都市危機を深く分析し市民の共通認識を広げて、「創造都市」への転換の必要性を明らかにし、将来に向けた大胆な創造都市構想を示すことである。



藤原のあゆみ(2017)『創造都市のデザイン』2017年10月発行
大阪府立大学創造都市研究センター
巻頭 佐々木 雅幸

「創造都市」を創出するために

第2に、その構想においては「芸術文化の創造性」を産業、雇用、社会制度、教育、医療、環境など多面的な分野にインパクトを与えるように位置づけ、文化政策を産業政策、都市計画、環境政策などと融合させて推進するために、従来の縦割りの行政機構を水平的に転換し、官僚的思考をやめ、組織の文化を創造的に転換することである。



藤原のあゆみ(2017)『創造都市のデザイン』2017年10月発行
大阪府立大学創造都市研究センター
巻頭 佐々木 雅幸

「創造都市」を創出するために

第3に、芸術文化を知識情報社会の中心的な社会インフラととらえて、市民の創造性を引き出すような制度設計に関心を集中することであり、具体的には都市の中に「産業と文化の創造の場」を多様に作り出すこと、そしてその中心を担う創造的プロデューサーの育成に取り組むことである。



「創造都市」を創出するために

第4に、創造都市政策を持続的に進めるためには、行政内部の取り組みのみでは不可能であり、経済界・NPO団体など広範な市民が参加する「創造都市推進市民会議」などの協力が不可欠であり、何よりも、創造都市を推進する人材を養成する研究教育機関の整備が重要となっている。

→大阪市大大学院創造都市研究科へ

創造都市のネットワークへ “Creative Japan” の試み

Creative Japan

～『生活文化創造都市』の発進と発信～

日本の多様な環境・風土によって培われた、さまざまな「感性」「技」「知恵」それは地域の産業を育み、人々の豊かな生活文化を創造しました。創造的で感性あふれる人が主役の、新たな「生活文化創造都市・地域」への試みが始まりつつある今、その実現に向けて、地域固有の輝きを生かす革新的なひとづくり、モノづくり、まちづくりへの夢・意思・提言を世界に向けてアピールします。

金沢・横浜・京都など 15都市のネットワーク

シンボル・モニュメント
「1兆0千億円の伝言」



おわりに

- 「創造都市」のネットワークの広がりこそが「あたらしい創造的な日本とアジア」をつくる


参考文献

拙著『CAFÉ-創造都市・大阪への序曲』(2006) 法律文化社
拙著『創造都市への挑戦』(2001) 岩波書店
拙著『創造都市の経済学』(1997) 勁草書房

Globality, Sustainability and Creativity: World Cities Contest

Globality, Sustainability & Creativity: World City Contest

Mee Kam Ng
Centre of Urban Planning & Environmental Management
The University of Hong Kong



Globality, Sustainability and Creativity: World Cities Contest

Contents

- Sustainable Creative World City, not just world cities: some theoretical discussions
- Assessment framework & methodology
- A contest of 9 world cities: results
- Concluding remarks



Globality, Sustainability and Creativity: World Cities Contest

Sustainable Creative World City: Globality

- World cities: commanding posts where HQs of business, finance and trade activities converge, via physical & virtual communication networks
- 'Articulating regional, national and international economies into a global economy'
- Friedmann, 1986: Primary core cities; Secondary core cities; Semi-peripheral cities
- Friedmann, 1998: Global financial, multinational, important national and sub-national articulations



Globality, Sustainability and Creativity: World Cities Contest

Sustainable Creative World City: Globality

Taylor and Smith, 1999:
A Roaster of World Cities: Alpha (>9), Beta (7-9) and Gamma world cities (3-6)



3: prime centre
2: major centre
1: minor centre

- Global Network
- Bank Network
- Media Network
- NGO Network

Globality, Sustainability and Creativity: World Cities Contest

Sustainable Creative World City: Sustainability

Ethical utilization of natural resources?	X
Inter- and intra-generational equity?	X ▶
Long term economic prosperity?	?
Restorative economy?	X
Reforming market economy?	✓/?
Ecological modernisation?	✓/X

The Centre of Urban Planning & Environmental Modelling
城市規劃及環境模型研究中心

Globality, Sustainability and Creativity: World Cities Contest

Sustainable Creative World City: Sustainability

Diversities in human resources?	✓
Cultural diversities?	✓
Satisfying basic needs?	✓/?
Equity in governance?	?
Social cohesion?	?
Equal opportunities?	X/?
Geographical equity?	X
Living within nature's carrying capacity?	X
Enhancing biodiversity?	X
Reduce/replace/re-cycle/reuse?	✓/X/?

The Centre of Urban Planning & Environmental Modelling
城市規劃及環境模型研究中心

Globality, Sustainability and Creativity: World Cities Contest

Sustainable Creative World City: Sustainability

- Sandbrook, 2003: the world's three wealthiest families → US\$135 billion > annual income of 600 million people living in the least-developed countries
- US\$150 billion per year: put an end to absolute poverty
- Friedmann (1997): 'public policies can make a huge difference for urban outcomes':
 - clean production legislation, policies and programmes
 - production based on recycling, minimisation of material flows, maximisation of transportation efficiency & utilisation and retention of locally generated capital
 - Equity in governance

The Centre of Urban Planning & Environmental Modelling
城市規劃及環境模型研究中心

Globality, Sustainability and Creativity: World Cities Contest

Sustainable Creative World City: Sustainability

The Development Gap

Category	OECD	Middle-income	Low income
% of world population	~20%	~60%	~20%
% of world GNP	~80%	~15%	~5%
% of world trade	~80%	~15%	~5%
% of commercial lending	~90%	~5%	~5%

The Development Gap

Legend: ■ OECD, ■ Middle-income, ■ Low income

Share of resources

Development Gap

Globality, Sustainability and Creativity: World Cities Contest

OECD (19% population)	Middle-income Countries (60% population)	Low-income Countries (21% population)
<ul style="list-style-type: none"> 50% global grain production 60% of artificial fertilizers 	<ul style="list-style-type: none"> 30-40% foodstuffs 	<ul style="list-style-type: none"> 500-800 million chronically undernourished Limited access to fresh water
<ul style="list-style-type: none"> 92% private cars 	<ul style="list-style-type: none"> 2 billion persons with no household electricity or telephone 	
<ul style="list-style-type: none"> 75% of energy use 80% of iron & steel 81% of chemical production 86% of copper & aluminium 	<ul style="list-style-type: none"> Around 10-15% of world energy and industrial production 	<ul style="list-style-type: none"> Mainly meeting energy needs by cutting fuel wood at higher than replacement levels 100 million without adequate fuel

Christie, I and D. Warburton, 2001, p.7, Table 1.1

Globality, Sustainability and Creativity: World Cities Contest

Sustainable Creative World City: Culture & Creativity

- "Cultural heritage connects us to our histories and our collective memories... it anchors our sense of being and .. provide a source of insight to help us to face the future" (Landry, 2000)
- An inclusive participatory process + creativity → mine the cultural resources for economic, social, cultural and environmental sustainability
- Urban Innovation Matrix: meta-paradigm shift, paradigm shift, basic innovation, best practice, good practice, bad practice, appalling practice
- The Creative City Development Scale: 1-10 (no creativity to self-renewing, self-critical and reflective creativity)

The Centre for Urban Planning & Environmental Management
城市規劃及環境管理研究中心

Globality, Sustainability and Creativity: World Cities Contest

Assessment Criteria

- Checklist questions: strategy & processes
- Indicators: sustainability, culture and creativity and globality
- Nine cities:
 - New York, London, Paris, Tokyo
 - Sydney, Hong Kong, Singapore, Taipei & Shanghai
- Limitations: data & evaluation methodology

The Centre for Urban Planning & Environmental Management
城市規劃及環境管理研究中心

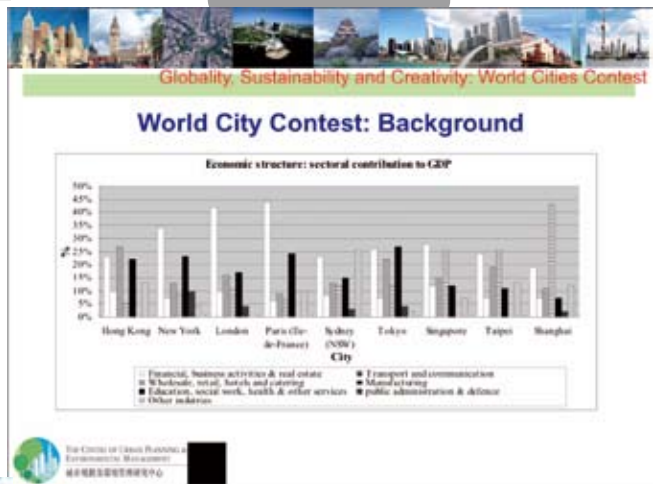
Globality, Sustainability and Creativity: World Cities Contest

World City Contest: Background

Area, Population & Population Density

City	Area (100 sq.km)	Population	Population density (INSTR)/1,000 sq.km
New York	10	10	10
London	15	10	10
Paris	10	10	10
Sydney	38	10	10
Tokyo	22	10	10
Hong Kong	10	10	10
Singapore	10	10	10
Taipei	10	10	10
Shanghai	65	10	10

The Centre for Urban Planning & Environmental Management
城市規劃及環境管理研究中心



- Globality, Sustainability and Creativity: World Cities Contest
- ### The World City Contest: Background
- Political system:
 - Shanghai: led by the Communist Party
 - Hong Kong: executive-led government without democracy
 - Singapore: parliamentary democracy led by the People's Action Party
 - New York, London, Sydney, Tokyo and Taipei: the mayors and legislature are democratically elected
- The Centre of Urban Planning & Environmental Management
城市規劃及環境管理研究中心

Globality, Sustainability and Creativity: World Cities Contest

The City Contest: Proposition

An open, transparent and accountable polity is an important basis for networking and partnership which in turn will facilitate co-learning and societal capacity building—it is postulated that the more democratic world cities should be more creative and sustainable than those with power concentrated in the hands of a significant few.

The Centre of Urban Planning & Environmental Management
城市規劃及環境管理研究中心

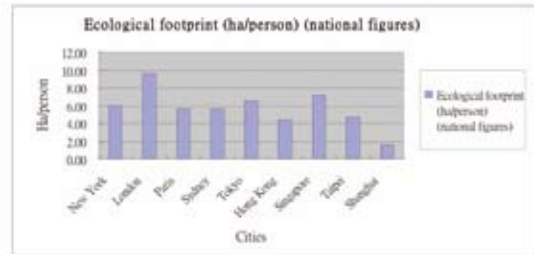
Globality, Sustainability and Creativity: World Cities Contest

World City Context: Strategy & Processes

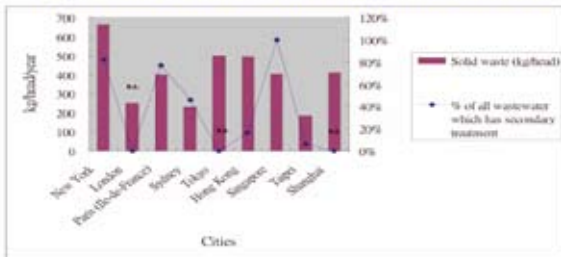
Questions on Strategy & Processes	NY	LD	Paris	SDN	TKY	HK	SG	TP	SH
SD-related international conventions?	✖	✓	✓	✖	✓	✖	✖	✓	✓
National sustainable development strategy?	✖	✓	✓	✓	✓	✖	✖	✓	✓
City-wide sustainable comprehensive & integrated development strategy?	✖	✓	?	✓	✓	✖	✖	✓	✓
Well-resourced commission on sustainable development with executive power?	✖	✓	?	?	?	??	✖	✓	?
Sustainability impact assessment?	✓	✓	?	✓	?	??	✖	✓	✖
Visionary leader(s) championing the course of sustainable development?	?	✓	Some?	✓	Some?	✖	✖	✓	?
Popular support from the civil society?	Some?	✓	?	✓	Some?	✖	✖	✓	?
Ecological modernisation?	Some?	?? Some?	Some?	✓	✓	Some?	Some?	Some?	Some?



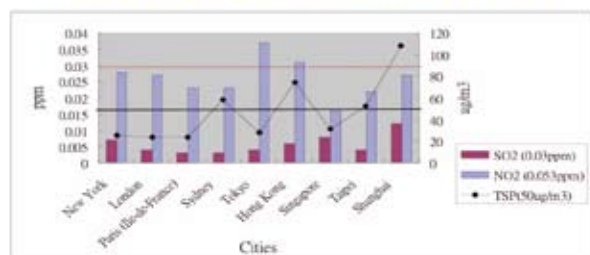
World City Contest: Sustainability aspects



World City Contest: Sustainability aspects

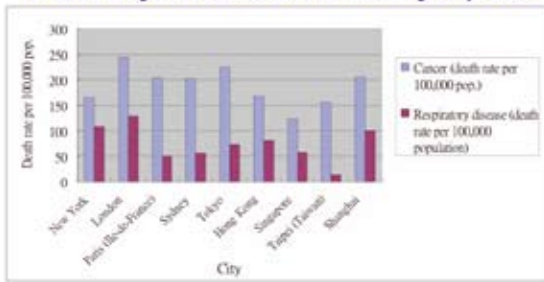


World City Contest: Sustainability aspects

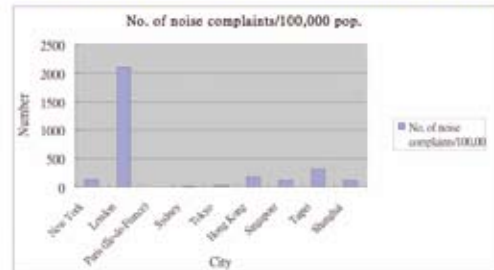




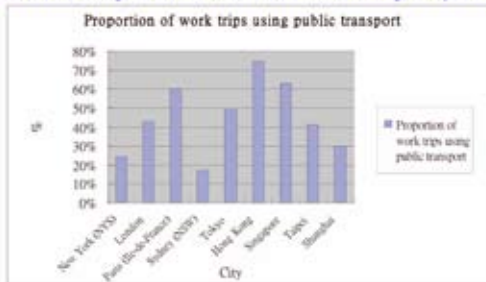
World City Contest: Sustainability aspects



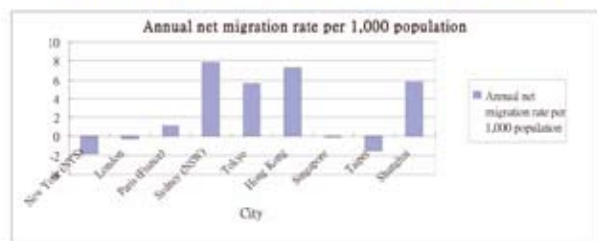
World City Contest: Sustainability aspects

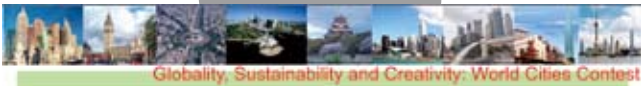


World City Contest: Sustainability aspects

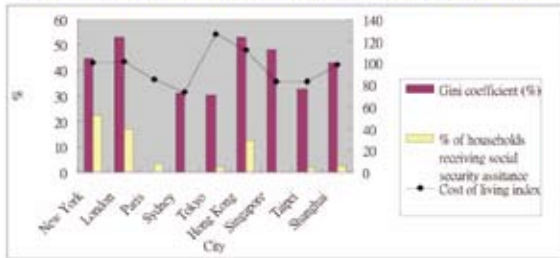


World City Contest: Sustainability aspects

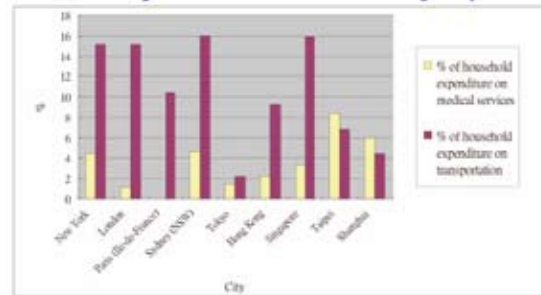




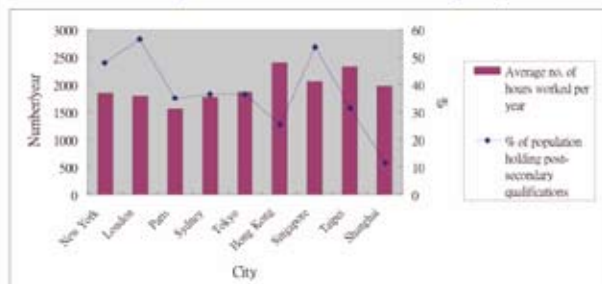
World City Contest: Sustainability aspects



World City Contest: Sustainability aspects



World City Contest: Sustainability aspects



World City Contest: Creativity aspects

City	Positioning in the Urban Innovation Matrix* (see Table 5)	The Creative City Development Scale (1 to 10, 10 being most creative, Table 6)
New York	Best practice?	9?
London	Paradigm shift	8?
Paris	Not enough information to judge	9?
Sydney	Best practice	7?
Tokyo	Best practice	6? Not enough information to judge?
Hong Kong	A mix of good, bad and appalling practice	4?
Singapore	Good practice?	6?
Taipei	Good practice	6?
Shanghai	Not enough information to judge	5?





Globality, Sustainability and Creativity: World Cities Contest

World City Contest: Globality indicators

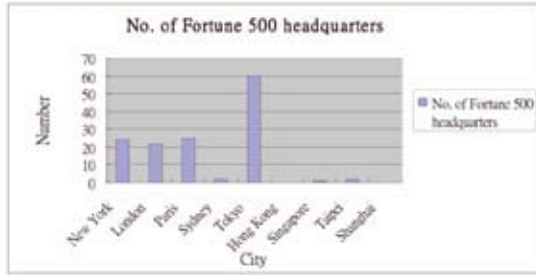
City	Ranking
New York (USA)	6
London (UK)	9
Paris (France)	21
Sydney (Australia)	19
Tokyo (Japan)	10
Hong Kong	11
Singapore	5
Taipei (Taiwan)	13
Shanghai (China)	57

The Centre of Urban Planning & Environmental Management
都市環境研究所



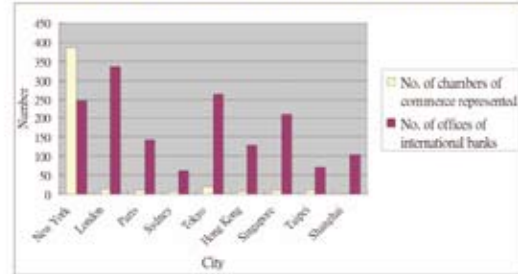
Globality, Sustainability and Creativity: World Cities Contest

World City Contest: Globality indicators



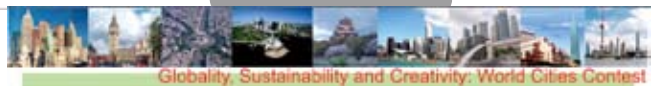
Globality, Sustainability and Creativity: World Cities Contest

World City Contest: Globality indicators



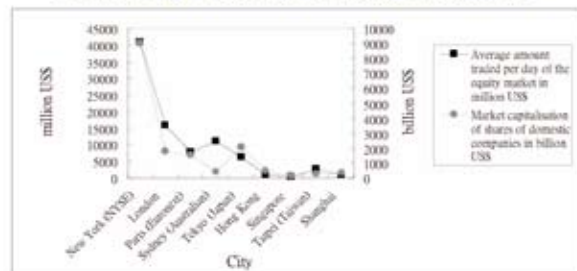
Globality, Sustainability and Creativity: World Cities Contest

World City Contest: Globality indicators



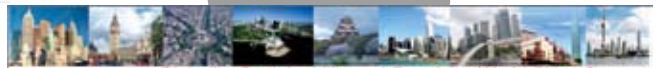
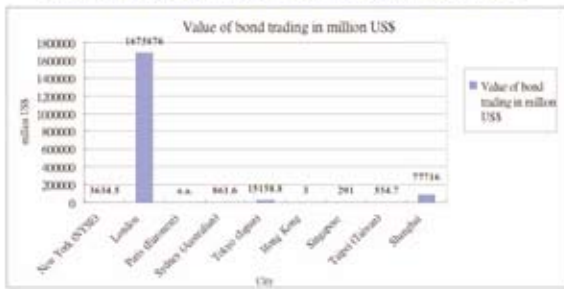
Globality, Sustainability and Creativity: World Cities Contest

World City Contest: Globality indicators

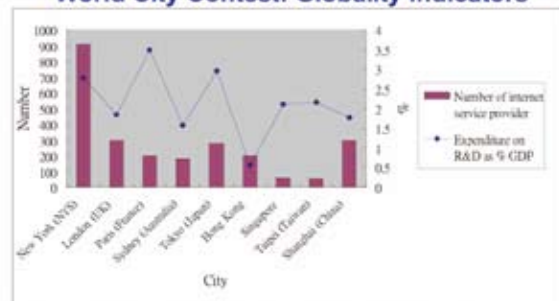




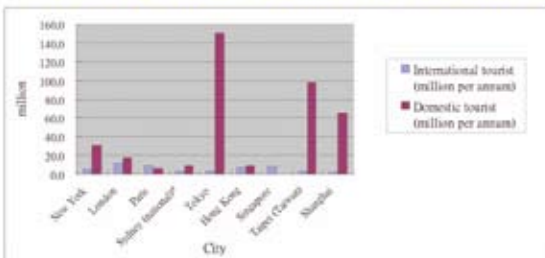
World City Contest: Globality indicators



World City Contest: Globality indicators



World City Contest: Globality indicators



World City Contest: Results

City	Sustainability	Culture/Creativity	Globality	OVERALL
New York	5	2	1	3
London	1	1	3	1
Paris	2	3	4	4
Sydney	8	5	5	5
Tokyo	3	4	2	2
Hong Kong	9	9	9	9
Singapore	4	6	6	6
Taipei	6	7	7	7
Shanghai	7	8	8	8





Globality, Sustainability and Creativity: World Cities Contest

Concluding Remarks

- A vision towards sustainable development puts London and Tokyo ahead of New York?
- Hong Kong as a creative global society: why the scores are so poor? Problem with indicators choice & weighting
- ...
- Proposition: verified?
'An open, transparent and accountable polity is an important basis for networking and partnership which in turn will facilitate co-learning and societal capacity building- it is postulated that the more democratic world cities should be more creative and sustainable than those with power concentrated in the hands of a significant few.'



CHINESE CITIES

- * **hyper urbanization**
- * **institutional change**
from the socialist society towards
a more market oriented society

AMBIGUOUS PROPERTY RIGHTS IN CHINA

- * **the socialist public ownership of land**
and the transfer of use rights
- * **Chinese scholars =**
ambiguous property rights and
recommendation to define property rights

CLAIMING RIGHTS IN THE WEST

- * **indigenous people**
- * **environmental movement**
- * **human rights**
- * **intellectual property rights**

USE RIGHTS IN CITIES

- * **gated communities**
- * **anti-homeless laws in the United States**
- * **skaters & street parties**

PUBLIC LANDS

- * **the state as a real estate entrepreneur**
- * **the city as a real estate entrepreneur**
- * **eminent domain**

DEVELOPMENT RIGHTS

- * **private actor as a town planner**
- * **selling development rights**
- * **development rights market**

STORIES OF RIGHTS AND OWNERSHIP

- * **John Locke**

- * **Ronald Coase**

CITIES AS MODELS

- * **bulding new cities and the best practices**

- * **in urban studies: Chicago, Los Angeles, the European City**

- * **comparative urban studies: stereotypical, archetypical or prototypical**

CHALLENGES TO URBAN STUDIES

- * **redefinition of rights: property, use & development rights**

- * **accumulation by dispossession**

- * **the ethics of the built environment**

- * **a story of collective ownership**

都市研究プラザ開設記念・国際シンポジウム

21世紀の都市像

—世界都市・創造都市・持続可能都市—

2007年3月30日発行

編集・発行 大阪市立大学都市研究プラザ

〒558-8585

大阪市住吉区杉本3-3-138

電話 06-6605-2070



都市研究プラザ開設記念 国際シンポジウム

21世紀の都市像

—世界都市・創造都市・持続可能都市—

開催日 2006年12月21日(木)

場 所 大阪市立大学 学術情報総合センター
10階 大会議室

主 催 大阪市立大学 都市研究プラザ

後 援 財団法人 有恒会

財団法人 大阪市立大学後援会